明治三十二年十月十日

女學雜誌

第四百九十七號

WASON
HQ
1104
J74

Oct. 1899
no. 497

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百九十七號目次

◎社說
古の武育、今の躰育
女子躰育を評す
續海舟餘波（十）

◎講義
女學生の小說を讀む利害（山形東根）

◎家庭
美神の結婚觀（天行）
肺病の方々（肺を病める一婦人）
かつら下地の女役者
先づ損てざれば獲ず
妻の不平に就て（某女史が席上の談話、露草生筆記）
富める女を娶るべし（青柳有美）
厨房の宗教（金風）

◎雜錄
秋夜漫言（紫琴女）
高野山さ感情さ（左琴女）
憶高踏詩人、北村透谷（藤原北湍）
訶な熱海のさまよひ日記（二）有美

◎隨感
死の說法○秋の夜の鬼○詩を寄す無名の傑士
○心機無事

◎新刊書
平田郁子の傳○新小說○戀の那破烈翁○○廢語
末

◎片々

◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんさするを旨さす。
◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

◎女學雜誌定價表◎

前金		廣告料			送金
壹冊定價	拾錢	一行（廿二字詰）一回		前金拾錢	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總へて一割增にて計算せられたし
半年分定價	壹圓	同	三回以上	一割引	
一年分定價	貳圓拾錢	同	六回以上	二割引	
（內國無郵稅）					

代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事◎是れ眞に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候

明治三十二年十月九日印刷
明治三十二年十月十日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話番町十九番）

◎婦人科
◎小兒科專門

至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として温柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを良家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし交を交すをさへ道に缺くるものとし語るべき病症殊に子宮疾患の如きは醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯密かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を天折するもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや　本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として妄りに身を挺んで尊榮にして深遠なる醫學に志し研鑽多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて泥み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美德を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科にありては第二の慈母として狎れ懷き易きが故に幼兒をして畏ぢ怯れ失聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ本院長が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山彌生診察（本院午前　分院午後）
本院麴町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町一番地
至誠醫院

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第四百九拾七號
明治三十二年十月十日發兌

社説

古の武育、今の體育

女子體育論を評す

◎スペンサーが、智育、德育、體育と三つに分つて、一代を驚かす有名の教育論を發表してより、教育と云へば此の三つの區別があるもので、其一つ〱丸で別に施こすとの出來る様に思ふものが殖えた。随がつて、三つの間だに全然區畫があつて、たゞ其の一種丈けを專門に教えるものもあり學ぶものもあると云ふ次第になつて、爲めに種々の誤解を引起して來た。

◎一躰が、活ける人間を扱かうとで、其人間は、之れ丈が智、之丈が德と別になつて居るものではない。躰と云つても、無形の心と相關する所、至極密切で、どれ丈が有形の躰の働き、どれ丈が無形の心の働であると、明白に限るとは出來ぬ。左らばとて、話しをする時、(話の一層緻密な)議論をする時などは、一つ〱別に離して言はぬと判然せぬから、之を區分して明断に主張せねば成らぬのであるが、聞くものが之を聽いた上は、一つに纏めて、調和させて、活かせて、生命ある一個の躰として識認する様に覺悟せねばならぬ。

◎此の本論を心得ずして切りに躰育の事を論ずる族がある。其人は、日本に躰育が行はれぬから新たに之を流行せたいと云ふ熱心でもあらふが、浮かりすると、躰育に關する日本在來の理想を墮落させて、極めて下等なる躰育を主張するとになるので、甚はだ用心されねばならぬとである。

◎先づ飛離れて一つ考へて見るが善いので、躰育の無いと云ふ國が何處にある乎、國が開けぬほど躰育は中々活潑なのでたゞ其の躰育の理想が低くいと云ふ丈けの事である。日本に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

若し躰育が無つたならば、人間の育つ筈はない、子供の生れる筈もないのである。然るに、日本は有名の人口蕃殖で、其躰も西洋人に較べて決して弱くはない。西洋人が、一寸と足に風を引いて頓かに大病となるやうなものではない。素足でもあるく、眞裸躰でも暮らす。年中、肉一片も食べないでも至つて丈夫である。(夫は、野蠻だと言ふかも知れんが、野蠻開化の論は別の事である。頻りに日本人は弱い樣に言ふ人があるから、斯く言つて措くのである)。

◎ソコデ、女の躰育と云ふとに付いて、近來殊に熱心に論ずる人がある。是れは、無論贊成するとであるが、シカシ、其方々が、日本の婦人に在來躰育が無つた樣に思ふ人の多くあるのは笑ふべきことである。先づ、武藝より、踊に至る迄で、悉皆是れ躰育であるが、就中、女禮と云ふものが即はち躰育であると云ふとを心得ぬのは、如何にも見識の届かぬとである。躰育を見ると左樣の着眼であるから、扨てこそ其先生方が切りに主張せらるゝ樣な躰育に爲て仕舞ふのは、寧ろ理想の墮落であると言つたのである。

◎智育とは、智性の方面から人間を開發すると、德育とは、德性の方面から人間を開發するとで、躰育とは即はち身躰の上から人間を造りたてるとである。夫故、躰育の手の着け所は有形の身躰であるが、其及ぼす所は無形の心に迄で届かねばならず、又、翻がへつて、無形の心から、身躰に及ぼし來り、心を以て躰を鍛練修養する工夫に落ねばならぬ。躰育とは、身躰的教育で、決して躰斗り教育すると云ふ主意ではない。

◎よし又、躰斗り教育すると云ふ下の方の着眼點から見ても女禮などは、無論、躰育の中に入れねばならぬ。躰を鍛え躰を練り、躰をして自然且つ穩健の態度に熟せしむると云ふとは、女禮の一つの目的である。

◎斯く言ふと、今の躰育論者は直ちに駁擊する。夫はヨシ躰育の中だとしても、アノ樣な生ぬるい、不活潑なとでは、少しも躰を丈夫にせぬ。例せば、ロンテニス、馬乘り、狐狩、又は舟こぎ、水泳ぎの類迄を盛んにせねば、日本の女の軟細い躰が直らぬと言はれるとであらふ。

◎夫は無論、反對はしない、コンナとでも、爲たいと思ふものや又爲て差支へないものは爲さるが善い。然し、之を以て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

躰育と仕様と云ふのは、何か目的のあるとか、少し不審に思はれる。論者は、大方、西洋の事を聞込んで言はれるのであらふが、西洋でも、之を以て躰育とするのではない、遊びにするのである。躰育とは、一の教育である、遊びは、躰のくつろぎを伸すのである。似て太はだ違つた所ろのあるとを知らねばならぬ。尤とも、此の遊びが流行するに付て、其の遊び仲間に這入らせる一つの身だしなみとして之を教えるともある。其時は即はち他日の遊か、今日の躰育となるとであるが、初めから之を以て躰育としたのではない。又、爲様としても行はれるものではないのである。其邊の事情も辨別せず、現に西洋人が交際的に遣てるとを其儘に眞似るのが文明流の躰育であると思ふのは、愚なとである。夫故、もし斯る遊びを流行せたいと思わば、新風俗を起すの工夫から着眼して誘導させねばならぬ。躰育論とは別の事である。

◎外から見た躰のコナシ方で、活潑不活潑を一概に論じてはならぬ。躰と、心との上に實地影響する點から考へて見ねばならぬとである。左すれば、優婉閑雅な姿勢の中に、滿腹の氣力を凝めて、實際は非常に活潑なともあり、表面は騷々しく頗ぶる元氣よく見える中に、腹空に、膽薄く、氣力の少しも滿ちぬ不活潑なともある。況んや、遊山、遊歩のたぐひで、只だ無心無邪氣に遊ばせるとを主とする時は兎に角、躰育として、身躰の上から敎育の理想を施こさふとする時には、斯る外面一方の着眼から容易に評斷しては成ぬと勿論である。

◎躰育に、個人的と、衆人的との二つあつて、一人宛行ふものと、大勢相寄つて一處に行ふものとの別がある。一、二、三の號令、もしくは音樂の調子などにて、大勢一處の躰育を指揮する時には、規律、修整、調和などの德を躰の上から注入開發するので（個人的の時に於ても出來ぬのではないが、寧ろ大勢一度に行ふときの方便利であるから）である。其代り、其間だに調和と熱心とを十分に引起させぬ以上は、躰育として至つて價値の無いものとなるのである。衆人的の躰育が兎角、嫌われ（嫌われぬ迄も）無益の樣に思われて、熱心にならせる力の無いのは此故である。然し、躰育と云へば、先づか丶る身躰的操練即ち躰操のとに限ると、一圖に思ひ込む人もある。

◎夫故躰育の事に就て懷くべき緊要なる覺悟は、其の式と其

精神とをよく區別し、如何なる式に於てするにせよ、其の精神を十分に發揮せしむるやうにせねばならぬ。式とは即わち型で、當時の習慣と、時代の必要とに應じて夫々適宜に作つた處置振りである。例へば、武の藝とか、舞踊の手とか、女禮の式とか、玉投げ、水泳ぎなどのワザとか云ふ、夫々相應の形、（即ち躰育の施し方の式）は、宜しき樣に工夫すべきであるが、其形の何れたるにせよ、躰育の精神を發揮煥發せしむるに毫しも差支へはあるまい。敎ゆるもの、學ぶものが、其心得だにあらば、何等の式を以てするも、皆な一樣に躰育の目的を達し得べきである。必らずしも、此々の式でなければならぬと言つて爭そふのは、智育德育に於ても隨分あることであるが、ツマり偏狹極まる分らずやの言ふことである。

◎躰と心とは、不二相關の伉儷であるから、躰の故に心に影響すること多ければ、心の故に亦た躰に差響くことも甚だしいものである。氣が張つて居れば、躰も自然に丈夫であるが、氣一度び餒ゆれば、如何に骨格たくましく、肉づき十分の人でも、數日の中、直ちに瘠せて仕舞ふ。心配事が出來て、御飯が食べられず、翌日は早や人の目につくほど衰ろへると云ふことは、不斷よくあることである。此程密切の關係ある心に對して「イヤ滋養が足らぬ、運動が足らぬ、血の巡りが惡るい、顏の色が青い、西洋人はそんなものでない、肉を食べねば迚も働らきは出來ぬものだ」などと、たゞ餘計の心配をさせて、自から信じ氣に賴よる所のある其の氣を、餒やさせることだけをするのが、今日の衞生論で、此の論の爲に實際弱く成者が多くあるのである。德育の上から言へば、人の理想を高くさせて反つて人を弱くすることがある。智育の上から言へば、人の見聞を廣くさせて反つて人を懷疑にすることがある。躰育も亦た同じことだ。躰育論の爲に實際丈夫になつたものは餘り見ない。ヨシ多少はあつても、平素の生計と適應せぬ躰育で、少しの間元氣らしくなつてるので、直きに元に復つて仕舞ふのである。

◎日本の女は決して弱い方では無い。病氣の多少、根氣の强弱、壽命の長短から言つて見ても、無論、日本男子に優つて居る。西洋の婦人に較べて見ても、必らずしも劣つては居らぬ。太洋を橫ぎつて來るほどの丈夫な西洋婦人と、深閨に蟄々として暮らす佳人とを較べるから、其の相違を驚ろくの

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

で、同じ位の身分に付て比較したらば、左して懸隔は無いのである。此の意味に於て躰育を主張するのは、少し間違つて居る。

◎今にして、躰育を主張すべきは、智育との時間の割合から言ふべきとである。智育は、脳の上から着手して躰に屈かせる者、躰育は、躰の上から着手して脳に屈かせる者である所が、其一方が偏よつて多過るから宜しくないと云ふとは明白である。此の主旨よりして、盛んに躰育を論ずるが宜しい。亜米利加あたりでさへ、近年中々其の勢ひである。日本の現今の如く、先以て外國の文明を、目、耳の邊から早く入れ樣として脳斗り使つて居る所に於ては、動もして躰育を後に仕勝になるのは、自然の通弊であらふ。

◎夫故、今にして、躰育を言ふものは、智育との割合から其時間を殖やすと云ふ一點より論ずるのが至當である。而して躰育の形式は、經濟と習慣との許す限り、又、他日學校から出て後にも可成く引續いて行へる樣なる形式に於て施こすのが宜しい。決して無理に外國や、他所の眞似をするに及はぬ。就中、女子の躰育に付て言ふものは、此迄に躰育が無かつたなどと思つては成らぬ、之から其形式を改良する丈の心得で宜しい。而して、如何に改良すべきかに付ても、外面の活潑が無ければ、眞の活潑が得られぬなどと誤解してはならぬ。事情の許す限り、習慣に不都合なき限りに於て、追々と其形式を、更に戸外的、更に衆人的、更に愉樂的に改良するが宜しひ。吾黨の今にして尤とも賛成する所のものは、即わち女禮と柔道と、勞働とである。

◎くれ〳〵も注意すべきは、躰育に關しての理想である。躰育は、心をヌキにした躰の操練ではない、たゞ躰の爲の遊びではない。躰育は嚴然たる敎育で、躰の上から着手する圓滿なる高尚なる敎育の一端に名づけたのである。躰育丈でも人間を十分開發し得べしと思ふが、其の理想である。智育は文、躰育は武。即ち今の躰育は古の武育である。文武不二、文武一途、合せて人間の道としたる古の理想を忘れ、躰育を以てたゞ血肉骨格の死すべき身躰に斗り關係するものと思ふは、敎育學上の退歩である。かゝる主意で主張する躰育論者は、日本の躰育を進めるものにあらず、反つて之を退歩せしめるもので、即はち墮落である。

續海舟餘波（十）

◎支那の事に付いて、先生が常に別種異様の考を持つて居られたと云ふとは前にも述べたが、別種とは即わち先見で、たゞ其の當時の輿論と甚はだしく違つたから異様であつたのである。然し、年の立つと同もに、曩の先見が後の輿論となるので、左すれば最早や異様には聞えぬのである。今ま、序でに、先生が支那の事に付て折々お話しになつた談片を、其時々の筆記から少し扱摘して左に集めて見るに、今日となつては既に不思議でも何んでもない樣に思はれるものが多くある。然し今より五六年前、ことに日清戰爭の頃に於ては、國中殆んど此種の議論をする人は、聞かなかつたのである。

◎ナニ、支那が外國人に取られると云ふのかエ。誰が取るエ。支那人は、他に取られる人民では無いよ。

◎香港でも、御覽ナ。實權は、皆な支那人が持てるジヤア無い乎。

◎鷄卵でも、豆腐の豆でも、南京米でも、皆支那人から貰てるジヤアない乎。夫で、支那人を野蠻だと云ふやつがあるカエ。ナニが、文明ダエ。

◎支那にも、爲替があるそうだよ。何でも、ハタキの樣なもので。あゝ云ふ所へ下げて置くのだそうだ。そして、一本づつ切つてね、ホンの反古の樣なものだそうだ。夫でも、チヤンと、通用して、少しもあぶなくない。竹添なども、サウ言つた、「實に危險だ」と。ナニ、あぶないとがあるものか。大きな經濟が分らないからチ。實に日本のは小さいものだよ。

◎支那の公使がよくそう言つたよ。「あの官妓チ、あなた方がお出になれば、マア官妓を買ふのだが、一年の簪料が三千兩ほどだそうだ。珍らしい花ばかし年中作つてあるそうな。夫は大したものだそうだ。例へば、ワシが一寸と買にいつても子、中々急に出やしない。待たせて置いて、夫々もてなして其間にゆるりと化粧して、あゝ云ふ所（奥の出口）から、ゆつくり出て來て、チヨイと、あたまを下げて、夫ぎりで行つて仕舞ふ。夫でも、六十兩位出さなければ成らない。それでまた外の客の所へ行けば、直に簪から、衣裳からを替へるのださうな。公使がよく言つたよ。西洋人は、一万圓二

万圓の金剛石などと言ふが、夫は何年でもあるものです、私の方のは、其日ぎりですから、お替ではありませうが、價が高いとそう言つたよ。

◎王の植木鉢を買ひたいと言ふものがあつて、向ふに行つたが、五百圓位のをと、そう思つて行つたら、香港で、どふして、三千両、五千両、一万両と言ふ。三千両より下のが無い千五百両のをと言つたら、笑つた相サ。ヲモトを買にやつたものもあるが、矢張り千五百両、二千両以上と言ふのサ。何分、身代が大きいものだから、仕方が無い。

◎李鴻章かエ、何でも、日本の歳入よりは、少し少ない程だと、公使が言つたよ。

◎サア、公使は三万両位は貰ふだらふ、然し、あちらへ夫々しなければ成らぬから、物が入るだらふ。初は、日本の文人に、ドンスや、色んな高いものをやつたが、今では、こちらの小さいとが分つたから、矢張りお安い日本のものを買つて間に合せるよふに成たよ。

◎あの丁汝昌が、よくそう話したよ。日本の料理は、お安いが、二十両も出して、あつらへると、モウ無いと言ふ。夫に、何ものも、つめたいので困ると言つたけ。ヒラメだの、鯛だのと云ふ、同じものを、いくつにも料理して出す斗りの事だ。實になさけない話しだ。

◎李經芳などは、善いものになるだらふ、今では才氣が溢れて居る。支那の方では、ウケの悪るい方のたちだがチ。

◎ソウカエ、段々李鴻章を賞めて來るかエ。何と云ふとだらふ。夫は、伊藤サンなどの相手じやあないよ、外國人が見たからと言つて、ソウサ。何分、チヤーンと、信が立つて居るからね。

◎支那の本は、中島から大相くれた。いろ〱の随筆サ。然し段々字が小くなつて實に困る。初は、大きかつたがチ。随分好んで讀んだよ。夫は上手なものだ。有もしないとを甘くありそうに書くとなどは、實に上手だ。何でも、落第生などが書くのだそうだがチ。

◎李鴻章は、あゝやつて人を使つて遣るのだが、よく出來るものだ。己には出來ないよ。門下にも随分いゝやつがある。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

講義

女學生の小説を讀む利害

山形東根

女學生に小説を讀ましむるの利害如何とは、先頃高等女學校々長會議の一問題となり、世上亦數種の論ありしと聞きけるが、其如何なる輿論あり決議ありしや我れ之を讀まず、唯此かる問題ありと聞きたるが故に、平素の所懐を一言せんとす。

◎**女學生の種類**――一般婦人と云はずして已に女學生と云ふ須らく其程度と種類を見ざるべからず、今日の小說類、如何に不充分なりとも小學程度の者には解し難く讀み得ざる所、されば女學生とは男子の中學程度たる高等女學校の課程に準ずるもの、年齢よりすれば、十五六歲より二十四五歲を限れるものなるべし、則ち之を解して之を愛讀する程度を指すは素より論なきもの丶如し。

◎**所謂小說の性質**――小說は之を解する人によりて定義を異にするも、其描法の寫實と理想の派を問はず、其躰の自敍と日記と書簡たるとを問はず、其敍法の單稗複稗たるを問はず將た又た悲狀滑稽、有情滑稽等の美的分類の如何を問はず、又敍事、抒情、戯曲の史的分類等を問はずして、兎に角に人生を說明し社會を批評して所謂世態人情を容易く解せしめ、之によりて世態人情に關する智識と趣味とを惹起さんとするものは小說と解すべし、其不充分なるは未だ達せざるなり、其讀み惡きは未だ通ぜざるなり、通達せざる所の種類は之れ未熟のものにして其職分を盡す價値なしと云ふべきも、必ずしも小說に非ずとは云ひ難し。

◎**今日の女生は如何**――小說は右の如しとして、偖て女學生の之に對する嗜好は如何、余輩の見る所を以てすれば、高等小學程度のものは、漸く假字を辿りて切れ〱に解するを得るも未だ纏まれる一篇を會得するの能力なし、高等女學校程度に至りて次第に上級に進めば學力も進みて、之を愛讀するものも見ゆれども、今日の學科は女生に對して少しく多きに過ぐれば、學科を正當に修むるものは、平素之を閱讀するに遑なきもの丶如し、女學生に讀ましむる利害とは、少數者に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

稀れに見る所の利害を擧て云へるもの乎、僅少の弊を見て以て全般の問題となす、時に可なるものなきに非すと雖も、這般の事は一を以て十を推すべきものに非ず。又學科の研究に害あるが爲めに云へる乎、小説に耽りて學科を等閑にする女生假令之れありとするも其數多きに非ざるなり、女生の性質は男子よりも學科に對して忠實のものなり、之を等閑に附して耽るものと認むるは誤解に過ぎず、然らば唯今日の小説は之を讀ましむる利害如何と、單に抽象的の問題となしたるに止まれる乎。

◎今日の小説は如何――小説に對する吾人の希望は別に之れあり、唯大畧今の小説と云ふを見るに、一二流の作者を外にしては概して年少の作者にて世態人情に通達するに非ず、未だ漸く學校課業の餘暇に試みたるものと、卒業後新聞雜誌に數篇を揭げて所謂同穴の好評を蒙れるもの等に多し。年少にして經歷なく加ふるに學識極めて淺薄なり、從來の小説本より小説を抄作する如き者多き際、世の非難多きは自然の數なるも、今日の程度に於て徒らに之を咎むるも詮なきとなり。然れば今日の小説特に駄作物を讀ましむる利害如何との問題か、換言すれば八犬傳、源氏物語、水滸傳の如きを始め古來有名なる作物一切を除き去りて、唯僅かに「今日の小説」の未熟なるを讀ましむる利害か、甚だ曖昧なるとなり、又學科以外、如何なる小説にても凡て讀むとの利害如何と問はゞ、余輩は其種類によりて利害ありと答ふるの外なし。

◎讀むの害如何――小説と總稱せる上に於て讀んで害するものありや、答へて曰く未だ其趣味なきに強いて駄作物を讀み又は駄作ならざるも時代物、滑稽物の中には、解し難きものあり、難きものは之を讀まんともせざるべけれど讀んで益する所少なし、力めて讀むの要なきとありと。之れ素より學生にして學科修業の生活を爲す者に對する言なり。小説閱讀は學科以外なり、若し學科を等閑にする形跡ありて到底治し難き者なれば、普通智識の收得に害あるを以て之を節せしむる可なり。蓋し小説は普及せる全般の智識を得せしむる者に非ず、世態人情に屬するとにして、天然界には餘り頓着せざるを常とす。而かも之れ普通智識の學科を輕蔑して特得の智識を得んとするの弊あるに對する是なり。又今の小説は八犬傳類と其趣きを異にして、直ちに男女間の關係に及ぶ、其口繪は才子佳人の逍遙する狀、遊戲する狀、若しくは好男子、藝妓

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

上りの如き婦人の像あり、一見して先づ年少の子女に之を讀ましむるは、恐らく愛情の發達を促がし、彼れ小說中の人物を慕ふて、之を實地に演ずるが如きとあらん、之れ由々しき大事なりとは、父兄の屢々口にする所にして、余輩も實際上年少の子女等に讀ましむるとを好まざるなり、然れども之れ拙なく戀愛を描きたる小說に對する言なり。醜行悪事を遠慮なく寫實して斯情を發起せしむる如き種類に對して言ふ所、凡ての小說とは云ふと能はざるなり。然らば小說を讀むの利害問題は、學生たる職分に背かざる乎、學科を輕忽に附する乎、其種類悪しき乎の三問を解答せざる以上は、必ずしも害なりと斷ずべからず。若し夫れ其種類を撰まず、其學科を輕視して徒ほ之に耽るの狀あらんか、唯是等の者に於て害あるにて、之を讀むとを節する頗る可なり。

◎讀むの利如何――小說は概して容易すき文字を以て、何人にも解し易からしめ麗はしき句調を以て世態人情を描き、讀者を樂ましめつゝ世路に通ぜしむるを力むるものなり。一般に餘暇あるものは好んで讀むを可とす。高尚卓越の名を有して古今に絶する大作は素より力めて讀まざるべからず、婦人の如き婚嫁すれば實際社會に接するもの、必ずや先づ小說中より學ぶ所なかるべからず、然れども女學生たる特種のものは如何。

女學校在學の諸子にして、若し學科修業の餘暇あらば、其健康と其修業に妨げなき限り、先づ師父の撰定に聞き、之を閲讀するは敢て害なきのみならず、頗る利益あるを認めざるを得ず。余輩は先づ此條件を前提とし、而して其利を擧げんとす。

（一）、今日の高等女學程度の公私立學校は、智育に偏して情育を顧みず、德育の如き公立に於て特に不完全を極む、其教師間の軋轢する、其學閥に誇る、其教授けに不熟練なる、特に女性の何たるを解せざる者が、修身と稱し倫理と號して、説示せる所、頗る不完全なり。小說は情育の一種として之を讀ましむるの要ありとす。

（二）、婦人敎育上、情育を欠くるは其天性に背く者にして、理化數學博物の類、如何に深きも女は智的に拙にして情的に巧なる天性なり、此天性は社會自然の經濟的眼孔より益々發達する要あり、今日何を以て之を養成すべき、學科に加へて小

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

說を課するは今日の程度に於て適當せるものなしとするも、或る場合に於ては之を課する迄に至るべき者なり。

（三）、婦人は情的なるも理性の發達し難きもの、故に智育は言ふまでもなく必要なり、理性發達せさる自然的情は、徒らに深酷、慘忍に傾かしめ、或は些少の事に激して喜怒哀樂すると餘りに輕々し。故に情の發達をして正當に導かざるべからず、こは唯數學理化博物等の種類を過度に冷靜に注入するも到底得べからざる者なり。

（四）、婦人は一般に接する所の境遇狹く、交際の範圍淺く、感境觸興の少なき狀態にあり、況んや寄宿舍生活を爲すものの如き、唯一の天地は寄宿のみ、世態人情を此間より知ると少なし、廣く學びたるものは狹き所よりも大眞理を發見するなり而かも年少にして狹く學べる者は廣き所よりも世態人情を看取せんと少きを常とす。或は父兄の下、或は寄宿舍におりて其以外に出でざるもの、如何にして世間を知り得るか、此の如き場合に於ては小說を讀ましむる最も功あり。

（五）、婦人の情的性質に因みて之を發達せしむる道は、世間を知らしむるにあり、美育を施すにあり、文學趣味を起すにあり、社會的智識を與ふるにあり、美育は唱歌音樂室內の裝飾より學校の建築、園藝、其他衣服より禮式に至るまで凡て之等によりて力むるとして、世間の事は新聞雜誌及び小說により更らに會合を開きて社會的趣味を興し、精神を廣大に開發すれば、區々たる取越苦勞、些少の感動、鬱憂性、等の弊を除却するに足る、社會經濟法律國際上の智識をも得せしむるの程度に在る學校は之を力めざるべからず、小說は其一にして而かも樂みて傾かしむる種類に屬す。

（六）、官公立の學校の如く、唯規則詰めにして給料を取りて敎え月謝を出して習ひ、途上相逢ふも路傍の人の如き今日の場合、女子の敎育は彼等によりて實際爲さるべきものに非ず、唯一定の課業を學びたりと云ふに過ぎず、卒業といふ空名を擔ふに過ぎず、私立に於ては師弟の情誼厚く、或は會合を催して文學を講じ、或は遊戲を試む、其間に於て世間の實際を知らしめ、小說の良好なるを材として其人物を評し、斯くて世事に通ずるを得せしむ。世事に通ずるは婦人の性情の缺點を矯正する一大藥なり。余輩の平生、社會、經濟、法律と文學美術の敎育に意を用ゐるの要を說くは此故なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

誰か女學生の小説閲讀を以て害ありとする。害は讀むべき材質を撰ばざるにあり、職分を輕んずるの甚だしきにあり、今日の小説の駄作多きに座するのみ、其利に至つては擧げて數ふべからず、畢竟這般の問題の起れるは、今の小説家の描く所、野卑にして狹隘に、子女の痴情を惹くの外、感ずべき點少なきが爲めなり、一言すれば小説家の幼稚なると學校敎師の事理に通ぜざるとより來れる問題ならずとせんや。

◎大木はどふしてサウ評判が悪るいかネ。卑吝なせいかネ。太つ腹で、中々學者だよ。先づ今では維新の元勳と云ふのが、本當はアレ丈だがネ。一處に參議を仕て居た時、ヒヤなものだから、色々よく話したよ。夫で、何でも印をつくと、『アナタは御覽なさらん樣だ』と云ふから、『ナニ、チメーが爲る樣にしてるのサ』と言つたのさ(海舟先生)。

家庭

美神の結婚觀

天行(投)

戀する女は霞に匂ふ花の如く、戀する男は花の香にそふ霞の如し。盛春、花赤くして霞濃に、蕩然として醉歌を胸吟するに似たる天地は、中々に晩秋恨み長き、斷腸の虫の音を解せず。霜烈歎き多き、枯れ草の悲調を知らず。早春の梅が香に、哀人の腸を寸斷するの、秘密あるをかひせず。暮行く夏の雲の色に、恨人の胸中、無限の凋悵の情を、寄するあるを識らざるなり。然れども花は凋落して、碧苔に委し、霞は衰殘の暮雲と變じ、夜雨となり、痛惜の情を罩て、孤憤に濺ぎ、佳人ひとり、孤檠に倚りて、哀歌を愁詠するの時。盱、春はいづこに、花はいづこに、霞はいづこに、醉るに似たる胸中の狂夢、將に豁然として醒覺し來りて、色の無常を觀ずるのみ。醉たる戀は覺ざる可らず。若き戀は死なざる可らず。浮たる

戀は悲まざる可らず。覺めて微笑み、死して蘇生り、悲みて活たる後の戀こそ、不生不滅の清高なる戀ならめ。故にわかき男女の結婚は、少し美妙を裝ふたる、墳墓の下に葬らるるに過ず。戀して結婚するは、死せるラザロたらんが爲なり。清高なる醒たる戀に悟入する迄は、家庭は若き夫婦の墳墓なり。甦たる人は靈の人なるか如く、甦たる戀は靈の戀なり。人生の最悲調に觸れて死して活たる人は、人の人臭を脫したる人なるが如く、夢の時には容易に想像だも及はざりける、互の缺點に碎かれて、殆ど悃死して更生したる戀愛こそ、戀の色氣を脫したる戀愛にして、淡泊なる中に無量の趣味を有する、理想の戀の高調に達したるならむか。

殘陽、暮山の密雲に隱れて、菩提寺の鐘の音、靜に夕暮を告るころ。夕炊を調ひ、魯酒を温め、身は軒下に獨り佇み、薄暗き野路の果を眺め遣て、牛に乘て鄙歌を微吟なから、歸り來る牧夫を迎ふる、家婦も自然に近く。小さき荷車に飼草を積みて、後を小娘に押させながら、薄暮の野路を引きくる農夫も、此頃は覺たる戀を味ふなる可く。既に業を終て爐邊に座を占め、家婦の世間話を聞ながら、一碗の酒に微醉を買ひ、一日の苦勞を忘るる自然兒も、昔の浮たる愛情より、今は救ひ出されたるらしく、或は幼兒のすや〳〵と夢む傍に在て、良夫の靴足袋など編み給ふ、細君の心根も床しく、寬嚴よろしきを得て、小供の氣儘などを制する、家婦の腕前も中々に、書生の尊敬する細君は一寸賢に近く。家内一同夕飯を喫する時など、思はず下婢を吹出さしむる家庭も面白く。四十前後の夫婦の冴たる性質は、家庭の意味を深からしめ。酸も甘ひも甞め盡したる老母の、優に温良なるが如きは、家庭の品位を高め、誠に打解たる夫婦の間に、常に尊敬の心の顯れたるなどは、理想の家庭を實際に見るが如し。されど若夫婦の新世帶は、十年を經ざれば、趣味の深きを覺えしめず。家庭の乳臭を脫せざる可し。

予に知れる一友あり。彼は某法律學校を卒業したる男子にして、法曹界の立役なる、辯護士などを勤む。夫人は某女學院にて、高等敎育を受けたる由にて、英語交りの談話なども、頗ぶる滑にあやつられぬ。流石は亞米利加風の、臭味を帶び給ふ人とて、旦那の無學なのは閉口ですねなど、時に語たるともありき。予は良夫の親友に向つて、良夫の缺點を暴露

する婦人の大膽なるに喫驚せざるを得ず。後にて夫となく良夫に聞けば、彼は夫人よりも賢に近しと見へ、唯笑ひつゝ、妻は無學でも淑德の在るのを娶給へなど、異に注意めきたる言葉を、聞されたるともありき。或は予の尊敬する某女子敎育家にして、其妻君よりは自分の無學を、世間に暴露せられたる者在り、亦は予の知れる牧師の妻君にして、自個の學問を鼻にかけて、良夫の無學を紹介したるが爲め、竟に敎會を辭するの必要を感じたる者在り、斯のごとき夫人は、無論家庭の女王たる資格を有せず。良妻たる德藻を有せず。夫人たる見識なき者也。恁る內助者を有する家庭は、實に思ひやらる。

若しこの時に於て、男子の通有の弱點なる、蠻勇的の性質を暴露して、所謂斷乎たる壓制的の態度を採らむか、壓制の存する所、必ず反撥力の在るありて、弱點と弱點との衝突の結果は、竟に家庭をして鮮血淋漓の、修羅塲たらしむるに至る。家庭の悲事、之れより甚敷もの在るを見ず。我はかゝる塲合には、威嚴と沈默とを有して、斷腸の苦痛と、救拯の光明とを有する、ゲッセマチの園に僻退せざる可らず。家庭の

良夫たる躰面と面目の爲に、死を以て義務を全ふせんとする、トラファルガーの苦鬪に進まざる可らず。耐忍と同情と、趣味と理想とを以て、人の人臭を脫越したる、神韻高き最後の極致に達せしめざる可らず。

醒たる戀の結婚は、迷へる戀の結婚の如く、葡萄の酒に惑溺し、霞の色に懊惱し、花の匂に蹣跚して、一朝琴瑟の干繫成るや、互に閨門の怪夢、明烏の聲に破られて、胸中の熱度、俄に零以下に冷却するが如き者ならで、互の趣味を解し、互の理想を解し、互の缺點を解し、互の長所を解し、花の盛を知ると共に、凋落の憂愁を忘れず。陽春の婉美に微笑むと共に、秋夜の孤雁の哀を忘れず。早春の梅が香を悅ぶと共に、腸を寸斷する哀人あるを忘れず。濃なる愛情の美を掬すると共に、嚴然たる道義の存するを忘れざる、是等は到底、醉ふたる戀人の了解せらる可き、事柄にあらず。覺たる氣高き戀を玩味せる、愼み深き男女の心にのみ宿る者なり。美神は高貴に、純潔に、自然に、清婉に、白雲に浮びて無限を逍遙する、理想世界の女神にいますが故に、その聖情に適ふところの者は、永久の祀福を賜ふと雖も、賤劣、令色、假情の男女は、假令一たび平和愉樂の家庭を造るも、そは少

時の浮たる夢にて、忽ちに美神の咒咀は來むかし。日本國民の家庭は、殆ど總てに於て美神の爲に咀はれつゝ在り。是等の事實を顧みれは、教育ある男女たる者、須らく人生に對する高き理想を養ひ、天地に對する深き趣味を養ひ、散文の如き世界に餘韻を養ひ、意味深き人生に意味深き義務を全ふすべき也。

肺病の方々

肺を病める一婦人

◎日本は肺病國だと云ふ評判が行はれて來ました。肺病人の多い事、其の年々に増加することは、驚ろく斗りであります。病多きうちにも、此の病は至つて好かぬ病ひで、咳が出て、痰が出て、顔が鋭がつて青くなり初めれば、最早や此世の人でない樣に申します。「あの方は肺病だ」と云へば、モウ運命が極まつたものゝ樣に云はれまして、御婦人ならば婚姻も出來ず、殿方ならば事業も出來ぬやうに申されます。これ程、さびしい、頼よりない病氣は他にあるまいかと思はれます。固より天刑病と申すものもありますが、之は亦た餘り甚はだしいもので、且つ遺傳で御座い升から、御本人の不幸は申すまでも御座いませんが、他から見ましては反つて思ひやりが違ひます。肺病は之とは違ひ、美くしいお方、善いお方、一點も惡疾の無つたお方などが、俄かにお罹りなさるので、一入ほ悲しみが増します。天刑病は、根よりして宜しくない植木でありますが、肺病は、麗はしく咲いた立派の花に、急に虫がついたよふなもので、人生の歎きから申せば、之ほど哀れなことはありません。

◎然し乍ら、斯程悲しい肺病につきまして、私は一つ異樣の考を懐いて居ります。夫は、肺病は好かぬ病には相違ありませんが、決して生命をちゞめる病ではありません、反つて長生をさせるものであると、斯樣に信じて居ります。之は、自分で經驗しましたことで、今では寧ろ肺病の爲に長生をさせて頂だいたと思つて謝して居ます。多くの方々にも、左樣に申上て、毎度お慰さめを致したことであり升。

◎なぜ肺病になつて長生をするかと申しますれば、自分の用心を爲し、他人も用心をさせて下さるからであります。肺病にかゝつたは、陶器にひゞの入つた樣なものであります。其

のひゝを全く直して元の無垢に反ることは無論出來ぬことでありませうが、其のひゝを止めることは出來ます。其上、ひゝが這入つて居るからと云つて、何方も鄭寧に扱かつて下さる。手荒く使ふこともなされず、餘り熱い目、餘り寒たい目に會わせぬやうに仕て下さる。仕舞ふのにも、大事にして下さる。夫で、ひゝの入つた陶器が存外長く持つて、無垢のものがふいと毀はれて仕舞ふことがあります。丁度、夫と同様で、私が少し肺病になりかけましてからと申すものは、夫は〳〵皆様の御信切、まことに、涙のこぼれるほどであります。元は、隨分無理も致しましたし、又夫が好な方の質で御座いますが、其後は何方も〳〵寄つてたかつて、決してソンナことをおさせなさいません。勿躰ないほどのお扱かひで、眞とに樂な身分にして戴きました。夫で、私が肺病になつたと申すことをお聞になつて、色々仰しやつて下すつた極丈夫の方で、モウ三人ほど急にお亡くれなすつたのがあります。同窓の方の中で、人に羨やまれるほどお强かつた方が、五人もお失なりなすつたのに、反つて私が今まで長命で居ますのは、全たく肺病になつたからだと存じて居升。

◎夫は成程、もう直らぬ病だと承はりました時には、世も身も有らぬ樣に悲しう御座い升た。お醫者様のよく仰しやる通り、どうせ肺病になりました以上は、晩かれ早かれ、此の病で壽命を取られますのに違ひはありません。ソウ存じつめますれば、眞とに情けない様ではありますが、夫も又思ひ様一ツで御座います。元と、人間が死なぬこともあると申しますならば、いよ〳〵此の病で死ぬると極まつたのはつらいことでありまするが、申す迄もなく、人は皆な一度は死なねば成りませぬもので、夫は如何に御丈夫な方だと申しても、どうせ逃れぬことであります。万人が万人、皆な死ぬるものだと極まりました以上は、私一人更めて死ぬると極まりましたのでもなし、元々浮かりして居ましたものが、初めて死と云ふことのお話に氣を着けたと申す丈のことであります。左すれば、所詮は此病で死ぬるとなりましても、晩い早いは必らずしも分らぬものであります。老少不定、變化流轉、刹那も定まつては居りませぬ、反つて御丈夫な方が種々の變化にお會ひになつて、飛んでもないことが往々ありまするのに、前申しました如く私供の長生をすることの出來ると申升ものは、全たく肺病になつ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たお蔭で御座い升。左すれば、御醫者樣が、肺病の人はどうせ肺病で死ぬるものだとお定め下すつたのは、反つて安心で御座います。他の方々は、何んでお死になるのだか、まだ定まらないのではありませんか。死なぬことがありまするならば格別、どうせ皆な一度死にますものなら、早く此の病ゆへと極りをつけて、其の病を養生するほうが、宜しう御座い升。

◎實際、御覽遊ばせ、肺病に罹つた方は中々長生で御座います。尤とも、肺炎などと申して、必竟は、無理な不用生を爲すつた方は、速やかなことで御座いますが、俗に申すロウガイで、ぢりぢりと進みます肺病は、左して心を落すことはありませんと存じます。

◎世上同病の方々が多く居らつしやいませう。どうか斯く氣をお持ち直し遊ばして、心をひろく、愉快におなりなさいましたらば、一層御長命の事と存じます。

◎私の平素の望は、同病懇親會とでも申すものをつくりまして、肺病の方々一處に集まり、お互ひに慰籍懇親を願ひたいと存じます。肺病の身に取ては、肺病の方の御經驗を聞くほど力づよいことはありません。又、其同病の方にお目にかゝるほど、にぎやかなことはありません。

「かつら下地」の女役者

小栗風葉が新小說『かつら下地』こそ、釣合わぬ緣組の末遂げぬ悲しき手本として、心得あらん人の胸に秘めべき教訓なれ。左るにても、我儘なるは男子、哀れなるは、女の境界かな。一世の花役者、都門百万の人を腦殺する盛りの姿を見ては、善悪ともに一枝手折りて之を我庭に植えんとする耳が、男子の意氣地かへ手折る迄に狂熱し、後ちに冷やかとなるは、男の薄情にて、手折られし後は、散るとも、踏にじらるゝとも、他には飛じさするが女の弱みなり。空想にして虛榮なる文學士某が、ふと女役者を念ひ、遂に吾家の令夫人とせしかど、趣味、理想の天地の如く相違ふ伉儷の末久しく睦ましからん由もなし。女は決然として女らしき勇氣を決し、身を獻さゝげて一心不亂に仕へんとはせしかど、爲す事、爲る業の、學者らしからぬは言ふ迄もなし。草稿に思ひ屈する良人が夜寒に被ひかくる心づくしのチヤンチヤンコの、裏の緋きが赤心とぞ。情思齟齬し、變愛枯槁すれば、彼は文學士、此は女役者、もし其眞面目に立ち反らん日こそ、其赤の他人に還るべき日な

れ。悲しき哉、此の間にも子と云ふものは出來て、なまじひに離れ易き間だを結ばんとすらん。然れど、會者定離、合者必裂、彼等は遂に分れたり。分れし後いかに。男は、其子を他に與ふるとを顧みず、而して一層に世に時めかんが爲め閨閥に屬しぬ。女は、念々其子を忘れがたし、戯作舞台の假の親子の縁しにすら、狂るつて恩愛の情に泣かざるを得ず。男よきか、女よきか。其何れかを知らず。唯だ知る、釣合わぬものは、縁と云ふ断ちがたき奇しきものに繋がれぬよふにするこそ善けれ。

因みて惟ふ、世に一かどの女役者出でゝ、徒らに例の男ぐるひに縛られず、多くある婦女子の痛恨悲惨を生けるが如く活演し、述べず怨を呑む幾多の女が爲めに氣焔を吐くものなき乎。男役者をして、なまじひなる眞似事させ、眞にもあらぬ女氣質を代表せしめ、淺々しき益もなき所作を天下に見させて、之を以て女の樣に思はするは、口惜しからずや。役者を一の詩人として、世をして其品格に信を置かしめ、其の當然の地位に立つに至らしめんは、或は思ふ、女役者よりこそ初めて實行し得べきかと。

先づ捐てざれば獲ず

合わせものは離れもの、夫婦は素と他人なり。一朝の縁、ふと結ぼれて、偕老同穴の契りを爲すといへど、眞とに氣品趣好を等しふして、二身一躰の如く思はれん夫婦は、世に稀にこそあれ多くは無きものぞ。其の多くも有らぬものを空頼めにして、縁を結べば自から和樂極まりなき者と想像せば、後に悔ひて還らぬとのあるべし。惣じて樂しみは苦を經て後にこそ來れ、其の骨折なしに突如として與へられんものにはあらず。よしんば夫婦と云ひ伉儷と云ふ麗はしき名を掲げたりとも、本來、欲もあり我慢もありて心なか〳〵に曲けたり、朝たに道を開くとも夕べに聖者たらんと難ければ、我に難き程人にも難く、お互ひに未だ我儘の去らぬものと心得ざる可らず。此の我儘と我儘との衝突は、不快を來し、不和を生み、夫婦と云ひて實は讎敵の如くに迄でならぬとは限らぬものゆへ、伉儷の和樂は價なしに買ひがたし、先づ双方より我慢を抑へ、我儘を去り、敬意と禮讓とを幾久しく守りて初めて以て夫婦の樂しみを維持し得べきと知れ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

美くしき花の下に毛虫あるは珍らしからず、表面に麗わしと見ゆる夫婦の裏面に存外なる事のあるを世の常とすれば、若し人此の常あるとを常に心得て、稀有の僥倖を求めずんば、家庭の和樂之によりて與へられん。和樂を求むるものに和樂あるとなし、先づ何ものをか互ひに犠牲にせずば、天の報ひは降らぬものぞ。和樂は結果にして原因にあらず。

花の如き男女、初幕に立つ。意外の事に喫驚する夫婦、次に立つ。憂わしき面色、曇りたる風采に、世をかこつ哀れの男女、其次に立つ。左れど、可愛ゆきものも與へられ、世の實想を觀じ得て、空想を去り、理想を識り、浮雲を離れて青天を望むとを得し男女、最後に立つ。人生の活演劇は、幕ごとに種々の變わりのあるものなり。

子と云うものゝ可愛ゆきは、喩へん方なし。子を持し樂しみも亦た比べんものなし。左れど思へ、もし此の子によつて樂を得んと欲すとせば、不平失望のみぞ重なり來んなり。但だ何の報ひを求むるにもあらで、之を世話すると彌よ切にして其の愛の彌よ増し、此の愛の彌よ増すにつれて自づと其の樂しみの與へらるゝこそ、即ち天與の報ひならん歟。

妻の不平に就て（某女史が席上の談片）

ろそう生　筆記

◎此頃女學雜誌を拜見して居り升すと實に種々の奧樣だちがあゝもよく毎號續きも續いて不平、不平と云つて如何にも己が亭主のをちどを、れいれいと話し又は記るされますもんですねい。

◎私くしは自分ながらに餘り舊弊ではないかと思ふ程實に恥しくて皆樣の樣に主人に對して不平を申し上げることはどをしてもできません。先日、丁度私しの親族の者が亞米利加から歸つて參りまして、私しに滔々と、やれ女權はどうだとか、男女同權はどうだとか、頻りに大氣焰を申し升すか、蝶と申し升すか、何んだか、まるで女の口から申すようなことでは有りません、其れは其れは實にあちらの風かは知りませんが先づ日本風から評しますれば無作法極まる話しでとても私しなんかは、あなた方のような男の前では口を開くことも恥しい次第で御座り升す。

◎全躰一家の妻たる者が常に亭主に對して不平なんかを抱く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と云ふは之れ實に自分の耻ぢを示すような話で、言わば己が家庭の脩まりにくいか又は夫に對して充分の禮儀尊仕をも盡さず、兎角我儘の氣より亭主に不滿を抱かして自然とを互の間柄を隔てるようになり遂には不平なんかを引き起す樣になるんで、つまり妻が不平を申すと云ふことは自分の行ひの善惡を表すと同じことであり升す。

◎其故私くしなんかは、決して主人に對しては不平なんかと云ふことはをくびにも、思はず、つまり自分自身で不平と云ふ事は心の内に殺して居り升す。

◎何に亭主が藝者を上げても、女郎を買つても妾を置いても決して私しは不服を申しません、藝者でも女郎でも妾でも此の世の中にある以上は何にか其れそれ必要が有る爲に設けてあるんで、其れを男が上げたり買つたりすると云ふは全く必要品を買ふと同じわけです。然し又其れと云つて亭主が此の要品を買ふと云ふは、何にか己が家庭の内に面白くない事が有るからして斯くは多くの金をなげるんですから、其こで一家の妻たるものは充分こを云ふ事件の心に浮ばない先きから常々、よく亭主に一心をさゝげて務めなくては駄目です、

くことを云ふようなご亭主の留守に妻が男の友人と連れで歩いて
話をするとか、夜る遲く迄も家に遊り込んで御話しをする
とか云ふ事が、

もう一旦こを云ふ事件が起てから、わいわいと說いたり進めたりとも、俗に云ふ、盜つかまいて繩と同じことで何にもやくにたつもんでは有りません。

◎其れ故妻が不平を抱いて、やれ我が亭主は私しを馬鹿にするとか、愛せないとか、日本風はいやだとか、癇癪を起すとか、眞面目に家に盡さないとか、種々な不平を鳴しなさるは全く御自分の耻ぢを賣る樣なもんで、皆な夫から馬鹿にされるとか、愛せられない樣に成るとか云ふは、よく〳〵、源をたゞして見ますと皆必ず主婦が家庭と主人に對する行ひの我儘より生きたるに相違は有りません。

◎こを申し上げますと少し舊弊じみた樣で御座りますが、私しが此家に嫁しづきましてより此の方、只だの一度も主人の許しを得ず、無斷に男の御方なんかと手紙の往復、又は他の男の友なんかと決して庭へも歩いた事なんかは一度もございません、此を云ふ事は一寸只今の風から見ますと、餘程丁寧すぎる樣に見え升すが、何に總て此頃新聞屋さんが、どこの奧樣は妙なことがあつたとか、をかしいとか云ふ風說を雜報ふさぎに書かれ升すは、まんざら種の無い事ではなく、全

なことで、實に私しは氣の毒いように思はれ

くことを云ふよをな亭主の留守に妻が男の友人と庭でも歩いて話をするとか、夜る遲く迄一室に這り込んで御話しをするとか云ふ事が、决して實際は何んでもないことですが、兎角下女下男なんかと云ふ者は惡い方に許り目が進んで居り升すものですから、一寸偶にこをゆう樣な風を邪推して、すぐに井戶ばたの會議と成つて、而して遂には、何んでもないことが新聞屋さんなんかに聞えて大きく記される樣になるもんで、皆な今の御方々は一寸こをゆう所を其儘お搆ひなさらんから、忽ち大きくなつて遂には家庭亭主の亂緒と成りどをにもどをにもつかぬ樣に成つてしまうんです。

◎どをしても私しは妙な所に僻がありまして、今の奧樣方の樣に御主人の所に來た御客樣があると云ふて、主人と二人で出て、やかましくつべこべ〳〵と話しをすることが、何んだか氣に咎めて、矢張り主人の所え來た御客樣ならば主人の命を聞かなくては御目にかゝりません、其れ故又私しの所え客が參りますと、一度一寸主人に答へてそをして參るよをなことで、實に私しは氣の弱いよをに思はれますが却て女と云ふものは一旦家に嫁しづき、夫に仕へたからには、其の夫に全身を委かして總て意の儘に成るつもりで御座り升す。

◎先日矢張り女學雜誌に此の『妻の不平』と相對して『亭主の不平』と云ふ題が見えましたが、あれはどなたが御話しに成りました事か存じませんが、私しは堂々たる亭主が『妻の不平』に對して同じ不平と云ふ言辭を吐かれ給ふは少し、勿躰ない樣なことゝ思ひ升す、寧ろ『亭主の怒り』と云はれた方がまだ、適當であらうと考へて居り升したが、アナタ方のを考へはどをで御座いますか、少し伺がひたいもので御座り舛す。

◎一躰よく近頃のを方は西洋風を、を眞似に成るせえか存じませんが、やれ男女同權とか、女尊男卑とか申してお互に肩を並べて、どちらが亭主やら、奧樣やら一寸見別けがつかない、顏を見て始めて知れる樣な次第でそれはそれは實に妙なもんですネ。よく私しの家は毎日一度は必ず洋行歸りのちや

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

きく〵紳士がしかも夫婦連れでおいでに成り升すが、あゝもよく、皆樣が似てをいでになるのか、又は今の世の中があゝゆう、躰裁かは知ませんが、私しはどをしてもいやで御座いますよ。全く妻が不平なんかを起すとゆうわけは餘りに實は夫婦睦まじ過ぎるか、又は其れに反して餘りどちらか〻氣儘過ぎるかの二つの話しからできるので、なに云わば氣儘に相方がなると云ふのは夫婦の情の熱しすぎる結果であろうと考へて私しはをります。よく喩へにもある通り、『兄弟喧嘩は犬も喰わない』とゆう樣に夫婦がを互に喧嘩したり不平を言ひ合ふ丈け矢張り段々と睦まじく成りてくるので、まあ不平も時によると愛嬌になるもんで御座い升す。

◎如何しても私しは西洋風がきらいでなんだか此頃の若い頭に「コスメッチック」とか云ふものをつけて歩く書生さんを見ますと、矢張りあれでもすきに成る女があるんかと思ふて見ますと、實に世の中は妙なもんだと獨りで考へ迷つて居り升す。

富める女を娶るべし

青柳有美

我よりも富める家の孃を娶るべしといはゞ、こは折角の閨閥排撃と矛盾するに非ずやなど、鋒槍をむけらるゝ方々あるべし。されど暫く皷を鳴らすをやめて、心靜に我が說くところに耳傾けられずや。せつかちは、堅くお家の御法度なるを。昔より古老の敎ふるところによれば、嫁とらば凡て我れより一段と卑く貧しきところよりせよ、夢にも高き富める家々と緣組みせんなどの淺墓なる心あるべからず。然らば、その來りし嫁女は我が家にありしころより、何事もゆるやかになることゝて、身の辛さをかこつ如き悲しき心出でず、夫大事、お家大事と殊勝に勉め勵みて、勘定向きのことさへ、萬事つゞまやかに費え少なく、子孫末代までのため多かるべしとのことなり。されど、こは必ずしも、まことならず。我れは寧ろ一段と富める家の女を娶りし方、却て人の家の幸福なりとは思ふなり。

若し幸にして其來りし嫁女なるもの、愚に近きまでのお人

いよしにて、右よといへば右に向き、左よといへば左に向き、夫の命姑舅の仰せとならば、チヨチ／＼アワ／＼までしかねまじきほどなるか、或は又、其夫となり姑舅となるもの仲々の鋭物にて、荒ばれたがる嫁御を能く制へゆき得る程どのものなりせば、如何に之を貧しき氏より迎へしとて、兎角の難はなけれど、お人よしのお嫁さまにては、家事擧らず、妻秀でゝしかも夫に强情あり姑舅鋭ものなれば、家内風波を絶たざるの恐れあるを如何にせん。殊に近頃は、何事も文明の世の中にて、女權擴張といふこと行はれ、三歳の小女郎まで、凡て女の鼻息强き時世なることゝて、女人の看板さへかくれば、少し位の無理は通るを得るなり。況んや、殿達も、昔の如く威張り給ふものいと稀れにて、萬事御しとやかに、大分鼻の下長くならせて、鐵道馬車に席を讓り給ふなど、鼻毛讀ましむるを悦び給ふに至れるに於てをや。何故に斯く女の無理が通れば、貧き家より嫁を迎ふるは不利にて、富める家より娶るは、我家のためなるべきか。

世間の人々のうちには、よく下女などの、あまり物をザフカにして、つゞまやかなる心なきに驚き、これは雇人根性より來れるものにて、我が身をつねらねば其痛さを知らず、儉約といふ難有きこゝろ掛けなきためなりなど思はるゝも多けれど、必ずしもこれを使女の無責任よりとのみ定むべからず。一言にしていへば、凡て貧しき輩にて金錢に慣れざる人々は、却て豐かにして富めるものより、財を重んずる心うすく、之を粗末にする傾きあるものなり。またしてもうるさしと宣ふかは知らねど、例のジヨウペンハウエルの說によれば、この心殊に俄か分限の成り上りものに甚しとのことなり。これ、全く臍の緒切りて以來、黃金の色の賑かなるを見しことなき悲しさには、何となふ寶珍しく、あれもこれもと、餓鬼の餌食見つけし如く、あせりつくより起れるなり。この樣恰もかの盆正月の賽日に、僅か兩か二分の小使錢もらひしとて、萬金持の大盡氣取りになり、こゝの屋臺に立つて天麩羅の摘み食ひし、其所の小料理屋に入りて一杯傾け、それ芝居よ見世物よと飛び廻る丁稚小僧に似たりともいふべきか。また富める中に人となれば、何となく『貧』といふことの恐しく怖く覺えて、之を厭ふ心の起り、且つは、如何に微かなりとはいへ、何處にか父祖の遺傳といふもの殘りて、金錢をもつた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

、いなしと重ずる精神の出で來り、なるべく約かに〳〵と無駄なきを心がくれど、乏しきうちに人となれば、却て、貧しく卑きといふことさへ、さして心苦しきこと〳〵思はず、あるたけのもの使ひ果たせしとて、どうせ『もと〳〵なれば』と諦らめてか、手に入りし丈けは物珍らしきまゝに、怪しき氣前とかいふもの見せて、サラ〳〵と湯水の如く流し終り、仲々に財を推重するの心など浮かび出でざるなり。

貧しき家より、富める方に、嫁入り來れる女は、假令ば大賽日の小僧或は成り上りの分限者の如し。もし此の所にしつかりせる姑舅か又よく女人を操縱し得るほどの器量ある夫のあらば、素より論はなけれど、さなくば、その嫁女俄に動物園の檻出だされし熊公の如き心になりて、今までのせゝこはしさのなくて何事も自由に緩やかなるにまかせ、始めの少時こそ物慣れぬまゝに猫をかぶりて居れ、追々と化怪の皮をぬぎすて、例の金使ひ珍らしく、我儘のきく面白ろさに、何にの可にのと注文を増し、さては勤儉の心薄らぎて、金錢づかひ荒くなりもて行くなり。少し手綱をゆるめおせば、たゞさへ、あまれたがるは女の本性なるを、况んや昔に増せる豐かさとなりて、万事融通のきゝ易き富家の主婦となれるに於てをや。殊に夫婦水も漏さぬ仲となり、たゞ差し向ひの二人暮しせんなど目論み給ふお目出たき若男たちは、夢にも我れより貧しき女を娶り給ふべからず。追々と細君といふ君の増長に、我が家のため少なきに至るなり。(かくいひたればとて、素よりとは無學なる普通の女子に就て談れるにて、外國の言葉など操り給ふ女學校卒業の才德兼備なる女博士達は、無論例外なりと知るべし。)是に於てか、又ショウペンハウエルが『結婚の前貧しかりし女は、却て數千の持參金せる女より、何事につけ注文多く贅澤の積むものなり』といへる語の、今更ら理りあるに驚く。

而して富める孃を娶らば、即ち之れに反す。これまでとて日々財貨に慣れ、金錢の所理には能く通じ、その難有味といふもの覺へ居れば、自ら之を苟にするの心起らず、且つは乏しきといふとの、こよなふつらく恐ろしく又窮屈なるを知れば、事々に宜しきに適ふ金遣ひして、能く家政を理め、少しにても今より豐かなる境に遷らんものと、勉て父祖傳來の儉約心を動らかしむるに至るなり。これお家のため多きこと

ならずや。されば、姑舅もなく夫婦二人暮してしかも家政を宜しきに導かんなど思ふものは、必ず富める女をこそ娶るべきものなれ。博士ジヨンソンもこの一點に於て、亦、われと心を同ふす。

殊に、今の世はかの閨閥なるもの丶流行より、富めるもの丶孃は、多く腸なき男に奪ひ取らる丶時節なれば、志ある男子は、古への勳爵士のこ丶ろ起して、世の毀譽褒貶に顧ず、また此種の女人と相婚し、閨閥の道具に利用せられて、思はざる悲運に呻吟せんとする多恨の禍を救くはんこと、又これ、濟世得度の大慈悲ならずや。されば、閨閥の悪しきは、富めるもの丶孃を迎ふるの悪しきに非ず、之を迎へて電信をかくることの悪しきなり。

編者評す。有美君の情を以てして富孃を娶るが爲の勳爵士たらんものは、切めては鹽原多助が、即夜其振袖の長きを斷たしめる程の氣慨なくんば不可なり。

厨房の宗教

金風

永平道元和尚の家風、臺所の風に就き述ぶる所あらむとす。之に先ち、『赴粥飯法』の冒頭の語を引用せんに

經に曰く、若し能く食に於て等なるものは、諸法も亦等なり、諸法等なるものは、食に於ても亦等なり。方に法をして食と等ならしめ、食をして法と等ならしむ。是の故に法若し法性ならば、食も亦法性なり、法若し眞如ならば、食も亦眞如なり、法若し一心なれば、食も亦一心也、法若し菩提なれば、食も亦菩提也、名等義等也、故に等と言ふ。

以上は『赴粥飯法』即ち僧侶の飯を食ふ時の心得を書いたもの丶冒頭にして、一躰、禪宗は、此の打成一片の地に抵るを尙ぶので、それ故、別に此れが法、即ち宗教と云つて指すべきもの無く、法に於て等なれば、食も亦等なりで、法と食と打成一片なるを要するわけである

さういふ風な宗旨であるから、放尿喫飯など申して、禪宗では、隨分、穢いことや、毒々しいことを言つて、詰り道といふものは、チヤンと定つた所に片附けてあるもので無く、飢

來りて飯を喫し困し來りて打眠する、皆是に道である。故に修行の時と云ふ時も無く、喫飯の時と云ふ時も無い。食と法と打成一片であるから、隨つて臺所と云ふものも、食の爲めの臺所か、法の爲めの臺所か、銀椀に雪を盛り、明月に鷺を藏した樣なもので、見分が附かぬ。永年の臺所の風と云ふもの丶貴いことは、それで解る。

永平の臺所のことは、『典座敎訓』と云ふものを御覽になれば解る。

典座とは、寺の職名で、寺に六知事と云ふがある、其の一員で、衆僧の辨食を掌る役だ、即ち臺所の頭で、隨分世話の燒ける役儀で、大きな寺になると、飯頭と言つて、飯を炊く役、羹頭と言つて、汁を焚く役の坊主が居り、外に下男が居るから、典座は、中等以上の俗家の細君の樣なもので、單に、臺所の宰を振つて居ると宜いが、通常の小寺では、典座は、自ら手を下して、飯を炊いたり、汁を拵ひたりして居る。尤も古代には、典座が一人で、何も彼も遣つたと云ふことで、道元和尚の入宋した頃にも、天童山の典座は、天日の熱して、地甎の燒ける樣な中を、手に竹杖を携へ、頭に片笠無く、而も背骨弓の如く、龐眉鶴に似たる老人で、力を勵し汗を流して働いて居たのを見た、道元和尚近前して、法壽を問ひしに、六十八歲と答へた。和尚は、何如して行者や下男を使はぬのだと問ふたら、他は是れ吾れに非らすと答へたと云ふ 他は是れ吾れに非らずとは、自己の辯道は、他人の作得する所でないと云ふ意味で、前に擧げた食法一枚の邊から言はれたことで、實に貴い言葉である。道元和尚は、又老人家如法なり、天日且恁の如く熱す、如何ぞ恁地なると申しました、然るに典座の老僧は、更に何の時を待たずと答へたと云ふ。

古人は、さういふ風に修行した者で、詰り是れは、禪宗の宗風で、禪宗は、一法の人に與ふべき者無しといひ、一休も

何をがな參らせたくは思へども達磨宗には一物もなし

など申しました。一躰、宗敎と云ふものは、聖典とか、信仰條規とか、僧侶や、會堂、寺院の間にのみあるもので無く、道は什麼なるもので御座ると問はれて、さあ此れは宗敎であると指して示すべきものは無い。宇宙の道理は、要するに、一大公然の秘密で、普とも、遍とも云ふべきで、處として在らざるは無けれども、又これが即ち其れだと極つて居るわけで

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

無い。指す時は、既に遲八刻で、昔の人も鐵蒺藜とか、大火聚とかに譬へてある。

禪宗と申すことを、上文に屢用ゐましたが、我々は元來、何宗、何教と云ふ樣に、名の附いたことは嫌ひで、マア我輩の宗門は、臺所宗でも、手水所宗でも宜いのだ。然らば、極、容認的なのが善いので、雜糅など云ふ譏りは省みるに足らざるかと云ふに、基督教でも、將た他の宗教でも、信じて修行して居る人は、決してさうしてはならない。媢嫉の神と云つたのは、實に一言に云ひ盡したことで、極めて一本槍で、一心不亂、側目を觸らない心得が肝腎で、其の信の堅いことは、萬里一條の鐵で、仲々針一本挿すべき障の無い樣にならねば、何の甲斐も無いことで、容認どころでは無いのだ。

近頃、教育ある女子の婚禮して一家の經濟を扱ふ樣になりて後、種々非難の出るので、舊弊な姑御ばかりで無く、立派に文明の空氣を噏ふて居る少壯の男子ですら、却つて質樸、一片の、餘り學問立せぬ女子を望むものもある。それは社會事情の整理せぬ、一時の關係でもあらうが、又厨房の宗教と云ふものゝ無い、言はゞ食法等一の修養が無から起ることである。

雜錄

秋夜漫言

紫琴女

◎不平といふものゝある間は、人の心まだしも現世に望多きものなり、人事をいつもかゝるものぞとあきらめては、何を不平の鳴りものに、取出での音たて可きものもなし。畢竟は斯くして人間を送り迎えつゝある天地の化合に泣く外はなき事なり、古來人間恨事多し、天地の化合に泣きつる人は、そも幾億万を以てか數ふべき。其叫びや世のはじめの秋の風とはなりけらし、其涙や幾世々々の袂をぬらす、草葉の露とは置きけるにか、種こそ替れ人間の誰も彼も、滿つるを追ふて缺けたるを補はむとせる隙に、彼も逝き、是も滅ぶ運命は同じきを、賽の河原に石もてあそぶ、兒戲にも似たる大人の營み、要ありげにも負ふ其重荷は、そも何等の何に建てむとはする礎ぞと、不圖思ひわたりては、一切の不平といふもの消えて跡なく、心は只だ淋敷悲敷大空に彷徨ふて、人生の約束を窮むる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に忙しきのみ。斯くての後は、身邊の小故と、何の拘はる所なき、無味の平和となり了る。無味の平和と、苦悶多き不平とは、何れ忍び忍びよかるべきにか。さりとては人間到る所に思ひはあり。

◎小町が果もあなめ〳〵の野晒らしとなり了りては、是が夫れかと忍ぶ可き面影だにもなし。さあれ、まことと美人の眞相を確めたしの熱心あらば、往て野外に小町の髑髏を訪ふが、何よりの捷徑なる。道德道義といふ美相の半面も亦しかり。人の心汚濁ならぬものならば、道德道義の規律として、いつまでか世に標置せらるゝ要やある。さりとても亦汚濁にのみ安んじ難き人心なればこその、規律もいつしか要求せられ。永久是を渴仰す可きものとの信念は、つゆ衰へざる所以なる。換言すれば、數千年の昔にありて、はやくも世尊を要求し、孔夫子を要求し、救世主の降誕を須ちつるほどの濁社會も、强ち濁涙にのみは漂はされ難き、一點微妙の靜處あればこその投影を、世より世、人より人と受け傳へて、今も此三大光明を、世の規律とぞ仰ぐなる。這般微妙の消息を知り得たらむほどのものは、人心の未だ必しも淸ならず、未だ全く濁ならず、淸と濁との混淆交叉せる間に、道も生し、義も存し、善と德との喜ばるゝ所以をも、明らむる事なる可し。

然るに世には潔癖なる一見解あり、善を説かざれば、直に惡を勸むるものと疑はれ、淸をいはざれば直に濁を喜ぶものと斥けらる。斯の如きは道德道義の何によりてか現世に立てる半面の理由を外にしたるものといはまくのみ。醫も人體生理の蘊奥を究めざれば、まことと治病の術に秀づべきやうあらじ。然るも人心の病を救ふ道德道義は、此所ぞ病の醜惡なる方面を解剖せでも適切の投劑はなし得らる可きにや、疑はし。是を以て我は美はしき文字に依りて、美はしき道を説く經典を以て、一般人心の强壯劑と渴仰すると同時に、姑く不美なる個所を指摘して、是に適當の劇藥を注射せる諷刺も亦、痼病患者を警醒する一變法として、歡迎するを禁ずる能はず、しかも個は矛盾相容れ難きものなるにや。抑は萬有の矛盾の、夫れは一致を意味するものにあらぬか、きかまほし。

雲歸時帶雨數點、木落又添山一峯。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

高野山と愛情と

左琴女

我手と友の手と繼ぎ合しても猶且つ圍かぬるほどの杉檜彌生繁りて晝なほ小暗は南紀高野の山なりけり。弘仁の昔より滿天下の菩提所となりゐし所なれば今も嚴なる寺院多くありて餘所に見しれぬ靈幽の地なり。習慣上若き女のかやうの處へ行はなんとなく心咎めすれどはやくより敬ふべき人親しかりし人に多く別れたれば此人々の靈魂をよく祭らん事は身の勤めなれど事繁くて誠に怠勝なればいでや今の世も猶淸淨と聞く此山に諸牌を建て充分の追善せばやと先つ頃我この山に登りぬ。谷に瑞氣の滿たらん樣なるは大師靈德の余澤なるべし寺々道心堅固なるは眞言秘密の敎旨にたるべし這般の消息は拙き身のよく窺ひしるべきにあらず。唯我の此山に登りて限りなく嬉しかりしは世に類ひなき圓滿なる愛情の形を見しとなりけり。

はじめ極樂橋をこえて不動坂にさしかゝりし時あとの方より頻りに南無大師遍照金剛と唱名する聲聞えければ何心なくふりかへり見たるに年の頃三十七八の男と二三の女とうち連れくるなり二人ともさまで賤しからぬ衣は着たれど頭に菅笠をかむり背に少さき行李を負たりかゝる出立したるに似ず兩人とも色白く人品將立勝れをれどあはれ女の方は全くの盲目なりされば男の手より二尺ばかりの白布を出して女に持せこれによりて女は歩行するなり。そも此男女何所何なる人かは知らねど思ふに相愛せし妻のふと眼病に罹り醫藥功なくいつしか盲目となり果たるが夫は妻の病苦を見るに忍ず同情の涕の末終に祈願を大師にこめ金剛の力によりて再ひ浮世の月を見せんとかくは打連れ諸國遍歷に出たる事なるに醫藥を外にし病を神佛に賴るとの良否はとまれかくまれ妻を愛する夫の志の厚には無緣の我さへ感謝の涕禁する能はす男性を謂は憚あれども今の世の男子妻を迎へて親愛するは結婚後僅半年ばかりのみ此間に愛する愛は直に妻として愛するにあらず陽春の櫻に翩々する小蝶の如し蝶の櫻に翩々するは花の色の優に美しきによりてなり猶葉櫻の蔭も問はん是非とも万春を契らんの觀念にあらず云はゞかり寢の夢にひとしき愛情なりける。かゝる淺ましき愛の流に漂ひぬる夫婦の多き世の中なるにさても賴母敷は此夫の心なる哉多幸なるは此妻なる哉

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

世上大方の婦人の尤得難きとする圓滿なる愛の寶を一身に集め受たれはたとへ目に天地色素の配合を見るヿなり難きも心に欲はなかるべしうべなる哉此儉惡なる不動坂を登らんとする今なるも危懼の念顏に浮ず裊柔として從ひ行よと我餘念なく見てありしに二人の影はいつしか檜がくれになりぬ。程なく我乘ゐし山籠も巓に着きたれば將て或る寺に宿りぬ

下

此夜より今朝へかけ供養のヿ何くれとして今は其事も終りければ奧の院に參詣せんと寺を出づ道の序なれば苅萱堂に立よりぬこゝは永方年間筑紫の住人千里姫が夫繁氏と生別の情に堪へず子息石堂丸を伴ひ山の麓學文路の里まで來たるが昔は女の登山を禁じありしかば戀夫の戀の積り〳〵て重病となりしが終に其所にてはかなくなり後に石堂丸山に登り父等阿法師に值遇しその身も終に緇衣となり父子とも〳〵佛道修業したる草菴の跡なり。この千里姫を忍べば昔も圓滿なる愛情はすくなかりしかされど古しへの男はさばかり無情にてはなかりけん沙門頻りに愛の覊絆をたゝんヿを勸けり今の男は是非とも聖書の旨によりて愛の泉を深くなさねば覊絆は實にもろくなりたりもし宗敎によりて人情の變遷を見る者ならば人情によりても又宗敎に盛衰の現るゝは眞理なりけり。此所を出で一の橋を越ゆれば奧の院迄十八丁の間に諸大名の石碑數かぎりなく建あるなり此時案內に立たる十一二の男兒是は誰殿彼は某殿と息をもつかず說明するに御身さばかり骨を折り敎へくるゝも我は實に記憶の惡しければ十が一つも覺ゆるヿなりがたし夫よりは此山にふさはしき唱歌のあらん何卒それを歌ひ聞せ呉れすやと乞へば不審氣の顏してありしが歸へるさは御身の好む者何にても購ひあたふべければとく〳〵何か歌ひ玉へと催促せばさらば大師樣にてもうたはんかと屏風が浦に誕生まし〳〵と可憐の聲して唱ひ初ぬ此歌を聞つゝ行にいつしか中の橋も通り越し今は名高き御廟の橋に來りぬ橋のこなた左には天皇御歷代の御陵あり右には英照皇太后の御陵ありけり。橋の上より玉川を見れは流れは細けれど清く澄て潺々の聲も聞ゆ今は兩岸に秋草咲亂て美敷自然の姿水に映れり映れる花の影の中を多くの岩魚のぬけつくゞりつ泳ぎ遊べる其ありさまの面白さ我も岩魚に交て暫し遊ばまほしけれと云へは案內の少年眞顏に成て否々此山にて魚なぞと一所に遊び玉

はゝ坊樣にいたく叱られ玉はん其よりは彼所に見ゆる小松原にて初茸にても取玉へといふさらば歸るさにしかせんと橋をこゆれば將て奧の院の地なり行程に〳〵幾百年かそのまゝなる杉檜の枝に繁り重りて山の色黯淡たりまれに人影無にあらねど語る者あらねば寂とし寞とし崇高幽玄のおもむき限りなきに心恍惚としてたゝずめば身はいつしか燈籠堂の前にあり堂の裡を窺へば小さき燈籠數かぎりなく燈しありて實に晴たる夜の星の如し此堂を廻れば則御廟堂なり大師の姿は扉の内なれば見ゆべくもあらねど外に端嚴なる尊貌の佛數々おはすされど合掌して念佛するは人中にて何となく恥かしくとぼりと立をるも妙ならずされば有や無やの間に此所を去り又元の所を通り歸路に着ぬ玉川を越えたる所にてゆくりなくも又昨日の二人に行合ぬ昨夜寺に宿りても夢に現に我胸裡を離れざりしは眞に此人ゝの上なりしに今朝より身はこの幽寂の境に入りて浮世の事はとんに忘れ果をりしに此時神機一轉し又素の執着深き凡婦となりぬ今日は此人々管笠も行李も何方へか預けけん彼の二尺ばかりの白布のみ手に手にして奧の院の方へ行なりけり我懷さに堪へず此盲目の妻の袖をひかへ來しかたの概略聞まほしきと切なれど外に往來の人もあるに由なき事して此人々に迷惑かけんも心なければ思ひかへして唯後影のみ見おくりぬ。

吁今より山を下ればこの如き美敷愛の姿を再び見んこと誠に難し身に錦衣を重ね指に珠玉をつらね玉ふ奧さま等は却て夫君の無情無節操にあけくれ涕の絶ぬものとか扨ては何方に向ふてかゝるやさしき愛の姿は求めん乎。我は幾度にても高野の山といふなり。

噫、高踏詩人北村透谷

藤原北嶺（投）

(1)悲しき心に咲き出でし
花の香りの君が歌
なき面影をさそい來て
秋靜寂の雨の宵
思に沈む我が耳に
天の音づれの響く哉
(2)嘻世の濁流に君が身は
さをさす舟のかぢ折れて
はだづみに逝く船人の
悲しきさまにあられども
君を失ふ濁流の
世の行末ぞいたましき
(3)君は此世に出でまして
朝露に似たる束の間の
うたて幸なき生涯は
精神の苦痛に責められて
平和の日をば一時も
過ごせし事はなしと聞く
(4)嘻そも天の精神は
義人の恨を塵の世に
止めしめんさてか古も
今も變らぬ清秀の
詩人が腸に血涙の
悲痛の文字を刻まする
(5)さけれ多恨の君が身も
悲運の現世を泣かむ爲
薄き命も覩じつゝ
重き苦痛の天の量
優しき心に擔ひつゝ
憂らき此世に來ませしか
(9)現世の憂らき君のみか
病ひに塵に人の世は
憂き事繁き詩人の
心は月に花の恨
不平の涙悲みの
詩に燃えづる血の文字
(7)君青春の身を以て
早くも遊ぶうらゝかに
花鳥の謳ふ天國の
眞美の香り馥かき
平和の境の詩の中
嘻うらやまし君が身よ
(8)嘻したはしき君が身よ
今はた何處天堂の
光りに満てる星の間に
我は送らむ秋宵の
雨の雫のすさび歌
君さ語らん心にて（完）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

罸を熱海のさまよひ日記（其二）

悪魔の子　有美

『皇國人は、何故に比律賓問題に熱せずや。明年こそは北米國が大統領選擧の時なれ。いざ我れも彼の地に渡りて、其騒しき仲間に入りまじり、盛んに比律賓征伐の攻擊演說なぞし、デモクラット黨の肩持にてもせば、こよふ面白ろかるべく、かの人々とて又悦びぬべしなど思ひしが、事に妨げられて果す能はざるぞ恨みなる』とは、我が筆にうつせし跡なれども、かの東海居士が風呼び起すほどの快談は、なか〳〵さる容易きものならず。若しその言の葉の流れ出る道筋に、誤りて我が身躰ひき寄せもせば、憐むべし、サハラの砂漠に怪しき颶風にでも出遇ひたらん折の如く、遙か彼邊の七里ヶ濱の瀞頭まで、吹き飛ばさるゝこと請合なり。話は此る空想のみに止らず、愈々實地問題に入れり。『卿よ、日刊新聞を起すの心は、なき耶』と。關東一の旗頭なる東海居士は、かゝる事業など、蟷螂の斧ならぬ鉞を、金時が揮ふよりも易しとお思すべけれど、なか〳〵に弱き我が身には、頓智速妙の答をもえ出來で、しばし默然としてためらへば、傍らなる紫莞君、これは義勇奉公の心にてか、直截に斷案して曰く『げに青柳子こそ天來の新聞的人物なんめれ』と。さても世には怪しき人物もあるものかなと、今更らの如く自分の相場に驚き居りしが、東海居士の、疾風迅雷、塵を捲て來る如き話は、益々佳境に向ふもの丶如し。ことは國府津を非定して那處に輿を据ゆるの不利を說き、熱海を去る半里なりといふ伊豆山を薦むるにかゝれり。その物語りを漢ぶりに寫さば、さしたることもなけれど、こは、そのまゝなればぞ却て面白し。『伊豆山の地たるや、コロチル・ライトが日本第一の絕景だといッた程で、……巍峨たる巖が毅然として、かふ突ッ立つて居て、………それに囂々たる激浪怒濤が……かふシユウーッとやッて來て……ぶッつかるんだ。その怒濤の巖を嚙むさま……！それに白砂青松……その　何處までも白砂青松だからナ　○それから、上の山を少し登れば有名なる伊豆山大權現あり……○肺病の病人なんか、皆な……その岩うつ激浪怒濤に目を眩して……驚いて熱海に逃げて行ッてしまふ。それだから、閑靜だし……安いし、……正直で茶

代でもやると歸りに其れ丈けの土産をくれる……。すぐ下には温泉があり、頗る腦病に良し……」と、眼を瞋らし皆を張りあげ、さては、『かふシユウーッとやッて來て』と握り拳を精一杯に固め、腕を縱横に振り廻はすなど、こゝ其前に卓子あらば『諸君、慨歎に堪えんではありませんか』と、ドンと卓上を一ト叩きして、『ヒヤ〳〵』の喝采四方に起らざるべからざる所なり。居士は敎堂に說敎演說の心なりしなるべし。何時ながら、元氣よく話の大袈裟なるは此人なりけり。肺病ならざる我れの、この激浪怒濤に、目を眩はさゞりしこそ、幸福といふものならんか。

なは一夜あけて、また重くるしくなれるは、珈琲精入の砂糖水に緩みし例の腸なり。一昨日の夜、横濱にありし頃は、稍々快かりしに、また逆返りとは、抑々何たることぞ。これも所因あり。紫莞君と其ほそ君との歡待はまた格別のものにて、昨夜は牛鍋今朝は玉子。梨子あり林檎あり。まだ朝餐濟して間もあらぬに辨慶の力餅をも食へよとのことなり。京の比叡、滋賀の三井寺にも同じ名のものあり、比叡山のものなどは、堅き切り餅に青ばみたる黃粉つけたれば、觀るより何となく怪しく古代めきて、京の如き肺病加減の奴原には、なるほど之を嚙るのみにても、總身の力出で、筋肉の運動となり、さては力も増すべけれど、鎌倉のは然らず。流石は貴顯紳士の往きかひ給ふところとて、羽二重の如き軟餅に、溶けるが如き漉餡つけしなり。それに『辨慶』とは、ちとふさわしからねど、東方の學者の考證とやらに依れば、辨慶とは古今無雙の美男子にて、恰もこのあんころの如く、義經とは又無類の醜男子にて恰も比叡の切餅の如しとのことなり。こゝらに考へての『辨慶力餅』なるべし。これにて最早や底の出來しに、又しても奥方御手製の鎌倉蝦夷の天麩羅食へよとの有難き仰せなり。是れも謹んで承がひたれば、今や我が腹のうちには、脂肪澱粉蛋白質まで、なくてならぬ滋養分は悉く備へつ。かく詰めたればこそ、腸のゆるみ昔の如く、又心地重くなりしなれ。

この夜は巣鴨の村舍にて、原稿のメ切らるゝ日なれば、先づ兎にも角にも國府津まで行きて、その處に何か走り書きせんものと、正午の十二時といふに例の形ばかりの法師姿に、紫莞君の家を辭して汽車に乗りしが、この日も又降りこもる雨

なれば、かの息なき金佛様の慈眼を拜せんとの心は素より起らず、かの生命ある夫人の一族をさへ訪はざりしなり。國府津のステーション下るれば、前には小田原行鐵道馬車の駐れるがあり。そが後には又海のかひ間見えて、此景色の、濱邊の土手なる松に紋どられたるさま、珍らしき眼には、上なく氣に入りたれば、東海居士の勸告卓論も何のその、當分は此處に陣取る心になりぬ、格好なる宿もがなと、例の粧ひして探しながら、遂に町外れなる並木の邊りに至りつゝ、こゝに離れて海に向へる、小づまやかなる一軒の平屋あり、風流げに見ゆる宿屋の看板出せり。

正誤　前號に「ヴエナスの君」させるは「ミナルヴアの君」の誤なり、有美の頭兎角彼の神に醉はされ居るとて一寸筆のすべりしなるべし

一たび縫ひし我が心
二たび三たび　又裂けて
遂に縫ひにし我が心
また裂けつるか　この夕べ……　惡魔の子

戀せねば戀の心は知らねども
つらきぞ戀のこゝろなるらん……　瑞溪

隨感

○死の說法

われは素と『死』と云ふことに驚ろきて物事を考がえ初しものなり。而して後ち漸やく微の光明に接し、所謂ゆる更生と云ふことの斯るものにてやあらんと思はれて、心機一轉の幸福を感謝してより、少しくは世の樂しみと云ふものも覺えたれど、物の哀に泣く情懷は刻々として斷ゆるとなし。左るにても、世の人の『死』てふ事實に對して冷やかなる、何を以て能く斯の如きやと、或る時は不審かしみ、或る時は淺ましきことに思ひける。葬りの時など、眼前明らかに棺を觀、中に横われる人間の、昨日までも今朝までも談笑せし記憶尚ほ鮮やかにして、生死の分界實に間一髪にも過ぎざる由を認ため乍ら、依然として變化無常の理わりを覺らず、我躰のいつ迄も生存て死は決して來まじきもの、様に思へるさまこそ果敢なけれいでや、世の實相を觀ぜしめんとする時には、先づ死を說か

ん、其の迷ひを驚ろかし、其の落付けるを騒がし、直ちに老少不定の哀悲に思ひ到らせて、はたと人壽の賴みがたき由縁に覺醒せしめんとぞ期したるに、近き頃ろ樣々の新らしき經驗ありて、かゝる心得のふと弱わりゆけるに感じぬ。彼の凡衆、世の苦しきことを苦しとも思はず、淺ましきことを淺ましと覺らず、朝露の命を萬代と樂しみて、明朝の哀れも知らず、たま／＼に悲しきことに遭遇するも、亦直ちに之を忘るゝこと、寧ろ本來の面目ならずや。死を悲しきことに言ひ做したるは、多くは文學によれり、其の文學は古への心深き方の思ひやりに認ためたるにて、其の御方にこそ限りなきの悲哀にてありつらん。生れて未だ多恨ならぬ人のわざ／＼之を覺えんとするは抑そも無用の事なり。かの幼なき若兒等の頑是なく戯ぶるゝ時、わざと一家の苦しきことを告ぐべきかは。彼等の泣き叫ぶ時は、寸刻も容赦なき躰ながら、亦直ちに忘れゝばこそ、其の丈も伸び、其心も淸々しくはなるなれ。父母の出でゆく後ろ影に絶叫せし彼は、刹那を經て頓に笑ひ興ず、これ其の祝福にして其の自然なり。左らば、世の大方の人の悲しき死別を悲しきことに思ひ續けず、忽ちにして忘却して、依然として同に遊戯し、鼻歌ざれことの唱歌に踊りて、宛がら此世を一の幼稚園らしくもてなすこそ、正に是れ大悟の實相なれ。病みて後ち癒えしものも、病まずして健やかなるものも、共に健在とは云ふ。病なくして呻吟するこそ愚なしき業なれ。則わち、われは今ま、人々のあさ／＼しきを非らず、反つて其の益もなく苦しまんとするを好まず。老子曰く、萬物靜觀皆自得。釋尊曰く、初めて知る一切の成佛することを。西方の聖人、我大救主曰く、爾曹、孩提の如くならずば天國に入ること能はずと。

○秋の夜の鬼

花咲きて春は來り、木の葉落ちて秋は來れり。虫の鳴く音、雨のそぼふる狀、何となく蕭條なり。唯だ自からに哀を催ふすさへあるに、別して物思ひのあらん人こそ今は一入心苦しうおはすらめ。風冷やかに吹き、草細く枯れ、雲のけはひ尤とも定まらずして、夜太はだ長し。既に晩鐘を聞きて、烏の聲一きは悲しきに、更に虫の泣くを聞く。夜と云ふものゝみぞ唯一の慰さめにてありける人の今果た何處にか行かんや。

虫と共もに心置きなく泣き明すべきや、夢てふ自由の境に眠るべきや。ふとして思ひ起すよふは、天が下、吾と同じき心地する人の今は取分け澤なるべし。就中、親に離れ、友に別れ、いとをしき人に生別死別の苦しみを爲て、心細り、身細り、魂ひの消入りぬべく思ふらん人のなからずやは。余念なく眠れる者の顔ばせをつくづくと見て、淺きが好きか、濃きが悪しきか、覺らんは難し。生れて涙多き質となり、行末の恐ろしくして、總べて先づ冷やかにす。情花もし全たく開かば扨て如何にせんとて、早く蕾を取りすつる、寧ろ酷はだしき鬼なるか。鬼なれや、鬼なれや、秋のさびしく心細きを感ぜぬほどに鬼なれや。而して、鬼の姿を念じて其の心もちに倣わんとすれば、あやにくに鬼の角次第に落ち、口もと次第にゆるみ、相貌自から解けて、慈に優しき鬼の姿の亦もや現われんとするこそ心得ね。

○語を寄す無名の傑士

禍福綯える繩の如し。機輪回轉と云ふとに心を置きたらば、常に安んずべきとの無き如く、亦た何時迄も憂ふべきとと云ふはあるまじきなり。俗に絶躰絶命と云へる所ろに瀕すれば、機一轉の兆既に熟したり。今ま一と息の忍耐にて最早や福運に向ふべきに、惜しむべし人大方は此の所に於て倒るゝなり。若し泰山の崩れ落る如く困難負ひ冠し、暴河の押し流す如く不運續け來るとも、同じき事の十年間斷なきは稀なりと覺りて、叙ろに之に耐ゆるの工夫を爲すべし。左れば出所進退に節義を守りて、士の面目を保たんとするものなど、多年雌伏して捗々しきともなく、浮雲去來、庭草榮枯、年より年に致して、毎歳變れるともなき折節は、ふと思ひ起して尋常ならぬ企望を生ずるともあらんなれど、我に斯る誘惑の出ん頃には、他の大方の同志も亦た若あるべきぞと覺りては、忽まち改悟して今一段の理想に昇るべきとなり。世に沈默せる覺人あり、其人遠く重厚の國士を念ふ、寂として言ふ所ろなき所以のものは、心猶ほ賴む所ろあれば也。然るに、重厚の人亦た浮動せば、天下の大事夫れ奈何んせんや。大凡そ、邦家の骨髓は輕々しく動ぐものにあらず、淺人淺悟の騷き將た何程の甲斐あらんや。語ばを寄す、世上無名の傑士、須からく愼重にして偉大なるべし。其爲す有るの難きを憾まずして

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

反つて其起つとの早やからんとを懼る。人生八十、餘す所ろ幾何、たとひ若し白雲郷裡の人となるとも、豈に精靈の後輩を化動するとなからんや。

○心機無事

古人言ふ所の『大功無名』とは、偉勳に譽れなしとするの謂ひにあらず。曰く、名の名とすべきは常の名にあらずと。名は是れ實の賓、實あつて而して後ち名生じ、名定まつて而して其實屢ば違ふ。忠豈に忠ならんや、義豈に義ならんや。直ちに生機に觸れて刻下緊要の時務を施こす時、万古未だ曾て現在の此事なく、百世再たび今回の此時あるとなし。今人、今時に於て今事を處置す、豈に既定先決の「名」あらんや。即ち名なし、後人たゞ其影響する所に隨がつて名づく。名は墓標なり、其立てらるゝ時、骨既に枯れたり、之を奈何んぞ其人をや。故に、醒然として獨り直覺し、斷然として獨り處置し、機に立つて機事を行ふ。先輩あるとなく後生あるとなし。何んぞ所云ゆる名あらんや。古人乃はち言ふ、大功無名と。われは之を一種の別解となせり。

新刊書

○平田郁子之傳

「神に近き方」「同志社女學校の聖人」と呼ばれける坂田郁子平田夫人の小傳は松浦政泰氏の筆に成れり。嗚呼、靈苗未だ秀でず、秀でて未だ結穂多からざりし時忽然として長逝す。人世の恨斯の如きものはなし。左れど、其感化長久に存して不滅の靈動を爲す、稍以て慰さめとすべき也。今ま此の小傳によりて女史の人と爲りを窺ふに、左の如き數句遺筆によりて、明らかに其性格を見す。云く、

禪を離れて間もなく日光怨を射、我心をも照らすが如し、左れど我に要あり、即ち祈りて聖書を開く、曰く、我汝を撰べりと(日記)

聖書を說明する字義文意の解釋に汲々たるは、抑末のみ人を悔改に導き、其信仰を益する如く解釋せざる可らず、之に生命あらしめざる可らず(日記)

宗教の極意　私心を捨てて仁愛の道を行ひ、悠々として命を天に委する、是れ宗教の極意なり、宗教は無我無心の心にあり、恨みず咎めざるの精神にあり、敢て一身を以て世界の救濟に任ぜんとする大精神にある也。此道也、之を大にしては、リンコルンとなり、ジョン、ハオルドとなり、ブライトとなり、之を小にしては、夫に事へて倦まざる貞婦となり、子の爲に勞を厭はざる慈母となるなり。

花鳥にくらす都の春なれどかりの行ゑのわすれがてなる
いはかれも通れとおもふれど事を人こそ知られ神は聞らん

享年二十九才八ヶ月、夫人今や亡し。願ふらくは、此般の女士輩出して、女界靈秀の聖氣を綿々として斷えざらしめんとを。

○新小說 (九月分。第四年第十卷)

小栗風葉の政鷲は、其の結構布置に於てたゞならず苦心せられし跡方、これにも亦た明らかにて固より一と通りの作ならねど、「かつら下地」なんどに及ぶべくもあらず。政鷲其人と、少年侯補者とが、死せし乙女の枕上孤燈の下に述懷する一段は、情熱、氣品、光采を發すべき恰好の題目なるに、此すら憾をしくも輕々逸し去られぬ」。櫻凝居士が「雙面忠義鑑」は、讀まれん爲ならで、演せられん爲にて、殊に戯場前度の汚がれを清めんとの兩優が鬱散にも因めるとか聞けば、作者

秘密の苦心を度外に擱く可らず。尤とも此の短かき内に、親子の情、姉妹の愛、忠臣の苦哀など取あはせたる着眼は老巧なれど、今少し淡々しかなずや。露伴子が「鼠頭魚釣」は完結せり。前回よりの名文、波瀾、變化、極まりなくして而して遂に麗はしく結ばれたり。(かすみ)

○戀之那破烈翁

長田秋濤譯
春陽堂出版
定價六十錢

この書は一のパラドックスなり。我れは稱して『面白くしてしかも面白くなきものは長田秋濤子譯戀の那破烈翁なり』といはん。秋濤子は、蓋しかゝる作に適せざる人なるべし。この題目の如きは實に容易に得易からざるものにして、その含める材料の如きも頗る興味盡き難きものなり。されば、編者若しその當を得ば、よく人をして血を湧き涙を溢らしめて、多恨の才子佳人ために斯書に接吻するものあるに至らん。されど、惜哉、秋濤子は能はず。事實は唯石ころの如くにして聚まれるなり。この間に情熱の一貫せるを欠き、編者が『戀の那破烈翁』に對する同情なるもの、また殆んどこれあるなし。戀愛の狂熱を寫さんとせば、戀愛に熱狂する筆なかるべからず。惜哉、秋濤子にはこれなし。是に於てか、讀者はこの面白き事實の頁に眼を曝しながら、しかもたゞ疲るゝのみ、欠伸せんとするのみ、半途にして卷を釋かんとするのみ。全く讀了する如きは、カーライルが英語のコーランを讀める時の如く、大勉强に非ずんば能はず。是れ我が特に稱して『面白くしてしかも面白ろからず』といふ所因なり。されば之に命じて『那翁婦人關係字引』といふは、それ或は可ならん、『戀之那破烈翁』などゝ、文雅なる意氣な命名をなする至りては、斷じて不可なり。但しあれほどの大寫眞版を十數枚挿み、紙數をあれほど多くして、なほ且つ六十錢とは、博文館ならぬに、仲々大勉强の安賣なりと、譯者にも書肆にも褒めて遣はすべし。妄評一札件の如し。(有美狂生)

世界歴史譚第六編 麻謌末(マホメット)

坂本文學士著
博文館出版
定價拾五錢

坂本文學士とは、讀んで字の如く難有き稱號ある人なれども、恐らくは未だ文に慣れざる人なるべし。そのヤタラに生ま咀みの佛典語や熟字など用ひたるところ、甚だ讀み苦し。この書は素よりアツーヴングのマホメット傳などにはよられたるべけれど、かのチーイポツケなる『外教叢書』のイスラム●エンド●イツツ●フヲウンダー(回々教と其建設者)及其の他の簡畧なるものに取られたること多かるべし。これも『戀之那翁』と等しく、たゞ僅かにマホメットが外部の偉蹟を歎美せるに止り、マホメットなる人物の人格に同情なく、又マホメットを全くよく解せずして、たゞ鸚鵡の人眞似の如く、筆下ろせるは、口惜しきことなり。又著者はマホメットの教義にも通ずること薄きものゝ如く、ために旁々讀者の心を奪ふこと難し。せめては、同じ『外教叢書』のうちなるイスラム●アズ●エ●ミツショナリー●レリヂヨン(傳道教たる回々教)及コーラン經の批評など精讀會得し、少しはミユールの著作を窺かれたらば、これより稍ゝ面白くは、書けべかりしに。惜哉。表紙の畫も餘りに平凡なり。これは不折さんへのお小言。近頃は大分御筆も單調となれり。(有美妄批多罪)

◎編輯小僧　書きもせぬ者が莽筆と云ふ以上は、實際

片々

◎兵庫縣下教育の瑕疵　は一の完全なる女學校を見ざるにあり、高等女學校もなし 師範校女子部もなし。高等女學校設立の事、春來有志者間に唱道せられ、神戸市内神戸、三交兵庫等各教育團体より縣知事に建議せられしが其後の消息を聞かず(兵庫縣教育雜誌一二一號)

◎婦人のすき〲　「近畿評論」記者の曰く、

江州女　は旅稼ぎして金儲けの上手な男を好む
紀州女　は奸智あり口利口の男と緣を求む
藝州女　は內を外に遊び步き流連する男を愛す
出雲女　は火燵好きの隱居らしき男を戀しがる
尾州女　は歌舞に達し有藝の男子を慕ふ
讃岐女　は交際巧者なる輕薄才子に思を焦す
土佐女　は演說に巧なる政黨中間の男子を撰ぶ
奥州女　は美醜を言はず質素勤儉の男を重んず
九州女　は品位は扨置き躰質の壯健なる男を好む

◉編輯小僧　書きもせぬ者が主筆と云ふ以上は、實際書くものは、小僧と言はれば成らぬことにや。論士堂々名を署して矛を交ゆる時、忽ち影をかくし、小僧の名で挨拶すればエラソウにでも見えると思ふものにや。爵トカ、博士トカ、學士トカ云ふ名計りに閉口する連中には左もありなんが、吾黨には、一個獨自を存する小僧の方遙かに尊とき故、先づ好き相手として挨拶を與え置くべし。

◉內村鑑三君の女子教育　其の四谷獨立女學校に於ける經驗を記るして曰く、余に取りて女子教育は、今度が臍の緒切て以來始めての經驗なるが、男子教育よりも一層興味多きが如し、女子は男子(日本の)の如く生意氣ならず、能く命令を重んじ、靜粛にして從順なり、殊に文部省令なるものゝ女子教育を束縛するを甚はだ少なければ、今日の日本に在ては、自由教育を施すをは女子に限ると信ずる也。

◉菊女　池邊義象氏、佛都巴里のおとづれを「國文學」第九號に寄せたる中に云く、最もいまいましきは、菊女とも譯すべき書、先年、ある文章家の手に成りて、我國の長崎あたりの賤婦の事、さるは、さまぐ〵の臆斷說を載せたるより、日本は文明の性質を有せざる國のやうに思ひ候もの多く、時々、我等にも此書につきて話かくるものあるは閉口仕候。在留人集りてはいつでも此の書の不都合を鳴らし候得共、非常なる名文にて、今は殆ど日本の名は此書によりて擴がりたるさまに候へば、如何とも致方なく候。こゝに至りて文章と云ふものの効力あるをに驚かれ申候。

◉戰爭受負　中村彌六氏、三税復舊と軍備擴張とを併行すべき奇策を立てゝ曰く、米國が比律賓に費す金額每月六十万圓なり、吾兵之が受負を爲すべしと。噫是れ志士の立案なり。反つて米のブライアンは曰く、吾米國の同胞、何ぞヒリッピンに軍隊を送るを止めて、教師を送らざると。

◉禪宗傳道の秘密　とて栗園居士が東京經濟雜誌に連載せしものは、其宗教觀に於てよりも其學的調査に於て、中々の出來なりき。結末に曰く、白隱は白幽子を訪ひて養生の訣を聞き忽然として悟る。心學の開祖石田梅巖、母の看病し乍ら、孝悌忠信の大悟を爲し、其高弟慈音尼蒹葭は食を絕ち水をあび種々工夫を凝らす數日の時、忽然として悟り、手島堵庵は、俗湯の后、浴衣を纏へる時、中澤道二も東嶺禪師の說法を聞けるとき、忽まち大悟せり(東京經濟雜誌九九八號)

◉紅葉山人　煙霞療養と題して越佐旅行記をものす。中に新潟七不思議を列擧して、女に關して二不思議をあぐ、曰く、女土方の事、曰く、女名の奇なる事。而して五案外の一に算へて曰く、美人を見ざりし事(讀賣新聞、十月三日)

◉伊藤博文侯　の題にて、「高野教報」の一歌人うたひけらく、

たをやめの膝を枕にもちの夜のいつ迄かけぬ月を見るらむ。

◉亞細亞之女權　中村敬宇翁が歐米女權序に云ふ、古有₂神功皇后₁、輝₂武海外₁、周有₂太姒₁、以₂胎教₁著₂干詩禮₁、邑姜以₂才列₂亂臣₁、然則亞細亞之女權在₂歐米之先₁矣。

◉品川子爵家庭　夫人發病以來十四年、病やゝ烈しくなりてより八年に及ぶ、此長日月間、子の看護介抱の懇到なる、尋常人間の及ぶ能わざる所。且つ子が操行の嚴肅なる、從來決して妾を蓄ふる如きをなせず。若し婦人にして病夫に事ふるを十年此の如くならば官は必らず之を賞表せん。而して女子よりも其境遇に於て其性情に於てかゝる實行に六かしき男子偶ま之を爲す、感歎の至ならずやと。(中央公論)

◉外交官の結婚(洋婦との結婚は國害を釀す)　と題し、青木外相に實例を取つて放論するは「日本」新聞なり。曰く、洋婦提挈の外交官が其兩生國間に起れる難問題を顧みずして超然安座するあらは、是れ其一方が生國の利權を犧して以て此現象を呈する耳、男女同樣で候ふの權八のとハケましきおかみさんが何條無難に引込むべきと。

◉電話讀經　長崎某寺の住職或る檀家の棚經に招かれしも他用ありて行く能はず乃ち檀家の主人を電話口まで呼出し讀經して曰く如是我聞富士店頭一時秒時估客婦集足跡不斷一客歸去一客入來店員額上發汗爲珠眼眸廻轉主簿圓眼痿腕禿筆蔭柱老婦潤目一心拗兒注意座傍主公臨笑莞笑云々主人曰モー宣しう御座います(越中教報、第三號)

◉「日本人」第百號　眞とや「日本人」の遂に第百號に達せしは聖代の美事なり。彼は曰く、十有二年間、多樣の困難を凌ぎて漸く安固なるを得たるは、智巧の世に在りて大方の俠骨能く粗戇を容るるの證たらんと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎九條節子姫　去七月華族女學校初等中學科御卒業あり、此度左の御教授がゝりを置かせられ、御邸内にて學ばせ玉ふよし。

佛語(田中阿歌麿)◎國語及普通學(下田歌子)◎漢文(秋山四郎)◎習字(小野鵞堂)◎音樂(幸田延子)

◎ラッド夫人　九月三十日大日本婦人教育會にて「米國家庭の有様」に付て演じ、去四日は米國公使バック氏邸にて開かれし婦人質問會にて、ヘルン孃(盲聾啞の女學生　嘗て本誌に掲載せしもの)の事を談ぜられき。

◎神戸第三回裁縫講習會　十月二日町役場樓上にて開き三ヶ月にて卒業の答、入學六十一名。

◎長野縣機業講習會　八月一日より長野市正法寺内にて開かる。講習員、男七十七人、女三人。機業、染色の講義と實習あり。(「教師之友」第十三號)

◎看護婦取締自殺　赤十字社宮城支部看護婦取締中山春江子は、自己の監理に係る看護婦賄方に不正の事ありとの新聞の記事に激し、去月毒を仰で死せり。悲哉。

◎英國看護婦大會　七月廿一日、英國皇太子ウエールス親王殿下の宮殿マールボロー宮にて看護婦會の大會を開き、來集せる看護婦一千二百名に皇太子妃殿下より修業證を下されしが、其時妃殿下は一々笑を含んで目禮し、式終る迄一時間餘立ち玉へり。一時間千二百の笑をたゝへ玉へるは容易ならぬ事と人々申合へり。

◎土人基督教徒女子塾設立願　札幌區北三條西七丁目一番地英國人ジョンバチエラー氏ば土人基督教徒女子塾を設立し十一才以上十八才未滿の土人を入學せしめ寄宿之上基督教日本語諸禮式及び唱歌等を教授なしたき旨其筋へ出願せしが該費用は一人一ヶ月金七圓の見込なりと云ふ。

◎雙三女學校　備后双三郡原村の常光得然氏は反省會の創立者なり、今回同地に中學程度の女學校を設立せらる。

◎三ヶ月卒業の簡易西洋料理法を神田三崎町のキングスレー館にて教授すと。

◎山形の貞婦　山形縣羽后飽海郡蕨岡村鳥海盛壽が妻いし子に對し同縣知事褒賞して曰く。

性温良孝貞の志厚く夫の兄并びに夫狂病を發し家事を見ること能はず加ふるに舅姑亦た相次で病に罹るや日夜奉養扶披誠を竭して看護に怠らざるも終に舅姑共に死する附來家計頼に窮苦に際し日夜風雨を厭ふなく鋭意家業を勵み病者を慰め幼兒を保育し一身以て内外の要衝に當り克く一家を支持し十有六年の久しき志操一日の如し洵に奇特とす仍て賞として金六圓下賜候事

明治女學校受捐廣告

金七圓三十錢也	神奈川縣久良岐郡	金子喜一君
金五圓也	栃木縣	田中正造君
金五圓也	甲州東山梨郡	清水市右衛門君
金八圓也	伊豫新居郡角野村	鳴海忠男君
金五圓也	東京神田	小林富次郎君
金六圓也	播州姫路	山口源吉君
金十圓也	播州加古郡高砂	河合啓次郎君
金四圓也	同	河合儀一郎君
金十圓也	甲州中巨摩郡二ッ村	三神環君
金十圓也	千葉縣	寺田菊之助君
金十圓也	東京巣鴨	富岡幸助君
金十圓也	同	山本忠次郎君
金四圓也	福島縣中村	鎌田晋君
金一圓也	同	齋藤鄉八君
金一圓也	同飯豐村	竹村福弘君
金一圓也	同	洸捨次郎君
金二圓也	同磯部村	太田宗雄君
金五圓也	同飯豐村	村田信隆君
金三圓也	同石神村	幕内廣治君
金二圓也	同	村田與助君
金一圓也	同鹿島町	田原口瑛藏君
金一圓也	同石神村	佐藤櫶君
金二圓也	同原町	木幡次郎君
金五圓也	同福島町	中川傳三君
金九圓也	同	柴田二三君
金十圓也	同	鈴木三郎兵衛君
金二圓也	同	熊倉嘉助君
金二圓也	熊本師範學校	田代善太郎君
金一圓也	福島縣五箇村	洸義雄君
金六圓也	同田村	熊川詳長君
金一圓也	同庭坂村	無名氏
金十圓也	甲州東山梨郡	荻原光太郎君
桃三十本。瑞香花百十本。柿十三本。衛蜀十二本。鎗一本。法華經寫軸。古錦折物同卷物。		山本忠二郎君

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東京獨立雜誌

定價一部五錢郵税五厘、十部前金四十五錢郵税五錢、五十部前金貳圓郵税廿

五錢見本は郵券代用にて六錢

九月十五日發行の第四十三號よ　主筆
内村鑑三の興國史談を連載す

東京市神田區佐柄木町廿一番地
東京獨立雜誌社販賣部

月刊雜誌
無絃之響
（十月一日第參集發行）

內國無郵税毎月一回一日發行

壹册定價前金三錢
半年分定價拾八錢
一ヶ年分三十六錢

凡そ物平を得ざれば則ち鳴る。然れども徒に囂々の聲を擧げ、擾々の騒ぎを起こして、天下の耳目を驚動せんとするは、空名たゞ悦ぶ輕忽者流のことなり。我儕同人素より今の評論界に飽く能はずして、特に一團を作ると雖ども、之に名くるに又露草會を以てし、露と消え草と枯るゝの哀れを、天下の涙ある淑女君子に示めさんとするに過ぎず。されば我儕同人が私説を載せて世に頒たんとする機關雜誌の如き、更に謙して『無絃之響』といふなり。然りと雖ども顧りて思へば、無極は則ちこれ大極の源するところなれば、大絃の嘈嘈として急雨の如く小絃の切々として私語の如きもの、皆な含まれて我が『無絃之響』にあり。さあれ、ミミォグラツフ版の小冊子、紙數限あるの故を以て、評論の範圍を暫く文學美學の二科に止めたり。天下我儕同人の微衷を察憐せらるゝの士女、幸に購讀の榮を與へ給へよ。今や發行せる第參集には欄を餘韻、思詞、時吟、秋聲の回響に別ち、内餘韻には結核的漫性隨落者と創傷的急性隨落を論ず、艶顔細鳳あり、又思調には銃殺發止論、基督教と釋迦の教、佛の天豪「ガスタノロペル」氏の思想、承前、丈夫兒の涙、何れも美しき情けある筆鋒を以て響ゞられ、次に時吟には二幅對、秋濤子が那翁 椽下の力持と提灯持、紀行文の流行、又秋聲には露草子の序文其他和歌俳句三十二首之れ殊に純潔無邪氣の淑聲を以て歌はれしもの更に一讀の榮を希望す

發行所　巣鴨村字庚申塚　露草會
（御注文の諸氏は郵券にても宜しく候）

エフ、エチ、バーチツト女史著
小公子
LITTLE LORD FAUNTLEROY
BY MRS F. H. BURNETT.

上製美本石版密畫十數葉入全一册定價金一圓廿五錢郵税十錢並製クロース表紙美本定價金七十五錢郵税八錢

「バーチツト」女史の筆は、流快にして眞に迫るを以て、其名泰西に鳴る、本書も亦女史の筆に成り、字々句々一として快ならざるはなく、穎悟なる小公子が、天眞爛熳にして無邪氣なる所作を、寫し得て極めて妙なり、英文學研究に最も適切なるの書なれば、師範學校、中學校、女學校等の教科書として最適當の良書なり、

發行所　東京神田區雉子町卅二番地　東京神田區表神保町二番地
岡崎屋　中西屋

女學雜誌社出版書目

巖本善治著　再版 海舟餘波	正價金三十錢　郵税金四錢
巖本善治著　吾黨の女子教育	正價金十錢　郵税金二錢
島山三郎、植木枝盛二君合著　公娼可滅	正價金三錢　郵税金二錢
廢娼演說	正價金三錢　郵税金二錢
櫻井成明君譯　腓立比物語	正價金二十八錢　郵税金六錢
横山雅男君著　婚姻論	正價金十二錢　郵税金四錢

●今や原書の和製成れり。相列べて讀れなば、
●亦た英文獨學の余師たらん

故若松賤子女史譯述
再版
小公子

全一册洋装美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝと數十百回、一代の流行を左右して、一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作人を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し。讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや。少年固より讀まざる可らす、婦女老人亦讀まざる可らす。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かす、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巣鴨村庚申塚　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY